盛岡市内遺跡群

— 平成18・19年度発掘調査報告書 —

宿田南経塚

（宿田南遺跡）

2010. 3

盛岡市教育委員会

宿田南経塚と周辺遺跡（昭和 51 年撮影：国土画像情報「カラー空中写真」 国土交通省）

慶応年間の天昌寺～夕顔瀬付近（城下及近在図　慶応年間　盛岡市中央公民館蔵より一部拡大）

宿田南経塚遠景（南西より）

経塚全景

経塚主体部全景

経塚主体部土坑断面

経石 157 出土状況

経石 161 出土状況

経石（妙法蓮華経書写）

経石（梵字書写）

経塚盛土断面

経塚主体部土坑

序　　言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、およそ780箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建設にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解く上で、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成18･19年度に実施した宿田南経塚の発掘調査の報告書であります。県内初見の多字一石経が出土するなど、貴重な成果が得られています。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりますが、事業の実施や調査・報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただいた地権者ならびに多くの市民の皆様、ご指導やご助言くださった文化庁記念物課、岩手県教育委員会生涯学習文化課をはじめ関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

盛岡市教育委員会
教育長　八巻　恒雄

例　　言

1　本書は、平成 18・19 年度盛岡遺跡群発掘調査事業として実施した、盛岡市北夕顔瀬町に所在する宿田南経塚の発掘調査報告書である。本経塚は当初、経塚として認識されていなかったが、発掘調査によりその存在が明らかになったため、宿田南遺跡内に存在する経塚として「宿田南経塚」の名称を付けた。

2　本遺跡は、平成 18・19 年度に発掘調査を実施し、平成 20・21 年度に整理作業を行った。

3　本書の執筆は佐々木亮二が行い、各職員の協力を得て編集した。

4　遺構平面位置は、日本測地系　平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

宿田南遺跡　Ｘ -32,000 ＝ＲＸ± 0　・　Ｙ +25,000 ＝ＲＹ± 0

5　高さは標高値をそのまま使用している。

6　遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況を基にして、推定の範囲を表している。

7　調査体制　―平成 21 年度―

教育長	八巻恒雄
教育部長	菊地　誠
教育次長	佐藤義見
歴史文化課課長	武藤英富（遺跡の学び館館長兼務）
課長補佐	袖上　寛（文化財・史跡担当）、千田和文（埋蔵文化財担当）
主査	杉浦雄治
文化財主査	室野秀文、菊池幸裕、津嶋知弘
文化財主任	神原雄一郎、権頭裕子、今野公顕、花井正香、佐々木亮二
主任	岡　聡
主事	小野寺幸子
主事補	明地幹子
文化財調査員	鈴木賢治、佐々木紀子、吉田里和、高橋　史、小西治子、渡邊久美子
学芸調査員	相馬容子、佐々木逸人

調査の実施・整理にあたり下記の方々より多大なるご援助と御協力を賜った。ここに御芳名を記して深く謝意を表する（五十音順、敬称略）。

［発掘調査］　泉山紀代子、嘉糠和男、川村久美子、佐藤公一、谷藤貴子、日野杉節子、女鹿麗子

［室内整理］　泉山紀代子、川村久美子、竹花栄子、藤村睦美、村上幸子、村上美香

［地権者・調査協力］　堀江　晧（地権者）、板垣幸榮（北夕顔瀬第二町内会公民館長）、岩手県教育委員会

［御指導・御助言］

井上雅孝（滝沢村教育委員会）、上杉智英（国際仏教学大学院大学）、落合俊典（国際仏教学大学院大学）、定源（国際仏教学大学院大学）、船場昌子（八戸市教育委員会）、松原典明（佛教石造文化財研究所）

8　発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

目　　次

巻頭図版・序　　言・例　　言・目　　次
表目次・挿図目次・写真図版目次
Ⅰ　遺跡の環境……1
Ⅱ　調査成果……4
Ⅲ　総　　括……78

表　目　次

第１表　宿田南遺跡調査成果一覧……2
第２表　経石計測表……58
第３表　土坑墓一覧……64

挿　図　目　次

第１図　宿田南経塚と周辺遺跡……1
第２図　宿田南遺跡全体図……3
第３図　第９次調査区全体図……5
第４図　経塚平面図……6
第５図　経塚断面図……7
第６図　経塚主体部土坑……7
第７図　経塚主体部グリッド配置図……9
第８図　経塚主体部 経石出土位置図……9
第９図　経石 10（１）……10
第 10 図　経石 10（２）……11
第 11 図　経石 41……12
第 12 図　経石 95……13
第 13 図　経石 130（１）……14
第 14 図　経石 130（２）……15
第 15 図　経石 142……16
第 16 図　経石 104（１）……17
第 17 図　経石 104（２）……18
第 18 図　経石 148……19
第 19 図　経石 62……20
第 20 図　経石 125……21
第 21 図　経石 13……22
第 22 図　経石 55……23
第 23 図　経石 74……24
第 24 図　経石 144……25
第 25 図　経石 156……26
第 26 図　経石 162……27
第 27 図　経石 111……28
第 28 図　経石 153……29
第 29 図　経石 157……30
第 30 図　経石 31・181……31
第 31 図　経石 60……32
第 32 図　経石 97……33
第 33 図　経石 43……34
第 34 図　経石 135……35
第 35 図　経石 108……36
第 36 図　経石 170……37
第 37 図　経石 101（１）……38
第 38 図　経石 101（２）……39
第 39 図　経石 77・159……40
第 40 図　経石 6……41
第 41 図　経石 124……42
第 42 図　経石 34……43
第 43 図　経石 1・7・9・22・14・24・30・45・48・49・53・56……44
第 44 図　経石 83・88・89・114・122・127・36・68・91・103・154・167……45
第 45 図　経石２・４・15・17・38・90……46
第 46 図　経石 105・113・123・132・８・23……47

第 47 図　経石 77・42・85・155・3・16・18……48
第 48 図　経石 46・106・19・47・57・37・66・138……49
第 49 図　経石 110・64・182・40……50
第 50 図　経石 126・27・92・79……51
第 51 図　経石 44・5……52
第 52 図　経石 26・29・52・54……53
第 53 図　経石 69・70・81……54
第 54 図　経石 84・128・87・93……55
第 55 図　経石 131・161・171……56
第 56 図　経石 160・168……57
第 57 図　剥離痕のある経石（1）……62
第 58 図　剥離痕のある経石（2）……63
第 59 図　土坑墓（1）……65
第 60 図　土坑墓（2）……66
第 61 図　土坑墓（3）、RG004 溝跡……67
第 62 図　土坑墓・遺構外出土遺物（1）……69
第 63 図　土坑墓・遺構外出土遺物（2）……70
第 64 図　土坑墓出土煙管……71
第 65 図　土坑墓出土遺物……72
第 66 図　土坑墓出土古銭（1）……73
第 67 図　土坑墓出土古銭（2）……74
第 68 図　土坑墓・経塚盛土・遺構外出土古銭……75
第 69 図　土坑墓・遺構外出土経石……76
第 70 図　包含層出土遺物……77

写　真　図　版　目　次

第 1 図版　経塚遠景、経塚全景
第 2 図版　経塚主体部土坑内部、経塚主体部および盛土完掘状況
第 3 図版　主体部土坑礫出土状況、礫詰め方状況
第 4 図版　主体部土坑礫出土状況、礫種詰め方状況、主体部土坑完掘状況
第 5 図版　経石 10・14・34・93・130 出土状況、皇宗通宝出土状況（盛土内部）
第 6 図版　1・2・6・8・23 号墓人骨出土状況、RG004 溝跡
第 7 図版　剥離痕のある礫、礫 1・2・3 の剥離痕、経塚盛土出土　皇宗通宝
第 8 図版　土坑墓出土　陶磁器・かわらけ・煙管・銅鏡ほか・硬・軟石
第 9 図版　土坑墓・遺構外出土古銭
第 10 図版　土坑墓・遺構外出土経石、包含層出土遺物

※遺物の表現について

（1）経石

a　剥離痕のある経石の一部を掲載し、縮小率 1/3 とし、剥離痕の部位によって分類し、配列した。

b　礫の自然面はドットで示した。

（2）土器・陶磁器

a　弥生・続縄文土器は縮小率 1/2 とした。

b　陶磁器は縮小率 1/3 とし、薄い染付け部分は、網目（スクリーントーン）で表現した。

（3）銅製品

a　縮小率を 1/2 として器種ごとにまとめて配列した。

（4）挿図中の記号番号は、遺物の出土地点及び出土層位を表している。

（例）Ｇ６－Ａ２０　Ⅲａ層　　（例）１号墓　Ａ層　→　１号墓Ａ層より出土

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　大グリッド……遺跡の全体を５０ｍメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にＡ・Ｂ・Ｃ・・・のアルファベット、北から南には１・２・３・・・のアラビア数字を付し、Ａ６、Ｃ 12 など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※２　小グリッド……大グリッドの中をさらに２ｍメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にＡ～Ｙのアルファベット、
北から南に１～ 25 のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組み合わせで表した。

※３　遺物の出土層位を示す。

※遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

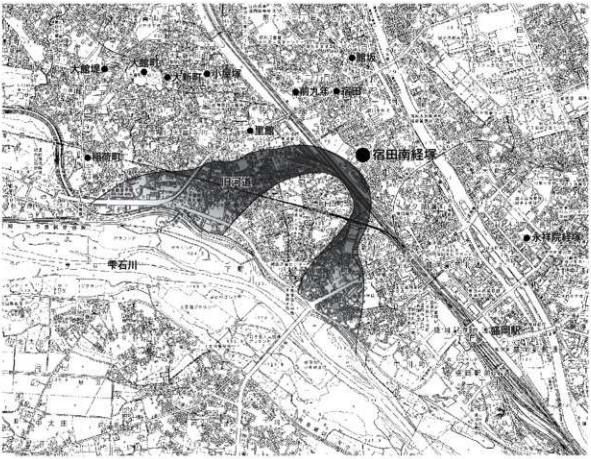
土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

Ⅰ．遺跡の環境

１．地理的環境

遺跡の位置　宿田南遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約 3km の盛岡市北夕顔瀬町地内に位置する。現況は宅地で周辺部よりも一段高くなっており、比高差は約２～３ｍである。遺跡の範囲は東西約 150 ｍ、南北約 150 ｍと推定され、標高は 132 ～ 133 ｍである。

遺跡の地形　盛岡市北西部から滝沢村に広がる滝沢台地の南東部は、北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巣子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。宿田南遺跡が立地する段丘は本来、滝沢台地南縁の一部であったものが河道によって侵食され、残丘になったものと考えられる。遺跡西側は４～５ｍと最も比高差があるが、これは雫石川あるいは諸葛川の旧河道が入りこんでいるためである。本遺跡の西側 500 ｍに位置する、天昌寺の南側も２～３ｍの段丘崖になっており、慶応年間の古絵図を見ると旧河道の形がはっきりとわかる（巻頭図版２）。江戸期以前は、川に面した周囲を見渡せる小高い段丘だったと考えられる。



第１図　宿田南経塚と周辺の遺跡

2．歴史的環境

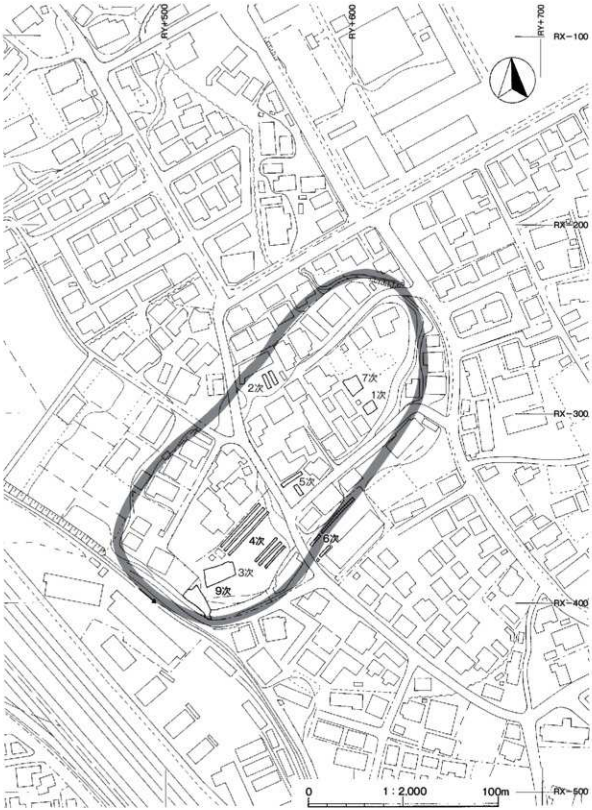
周辺の遺跡　滝沢台地南縁部には宿田遺跡のほかにも多数の遺跡が立地する。台地南縁部では西から大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大館町遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）、小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）、前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）、館坂遺跡（縄文時代草創期～早期）、安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文・中世）など幅広い時代にわたって遺跡が存続している。滝沢台地南側の一段低い沖積段丘面においては、稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）、里館遺跡（中世）など洪積段丘上の遺跡よりも比較的新しい時代の遺跡が立地する。各遺跡は埋没谷や旧河道により画されている。

3．これまでの調査

過去の調査　昭和61年度から17年度までに8次にわたる調査が実施されている。これまでに確認された主な遺構は溝跡5条などでいずれも時期は不明である。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
1	盛岡市北夕顔瀬町 8-36	個人住宅建築	33㎡	86.10.27 86.11.01	時期不明溝跡1、柱穴 20
試掘 2	盛岡市北夕顔瀬町 29-18	個人住宅建築	26㎡	90.11.06	遺構・遺物なし
3	盛岡市北夕顔瀬町 37-2 ほか	個人住宅建築	142㎡	94.08.22 94.08.25	時期不明溝跡2、柱穴6
試掘 4	盛岡市北夕顔瀬町 37-2 ほか	アパート建築	113㎡	95.03.27	遺構・遺物なし
試掘 5	盛岡市北夕顔瀬町 29-1	アパート建築	38㎡	95.11.16	遺構・遺物なし
試掘 6	盛岡市北夕顔瀬町 41-1 ほか	アパート建築	64㎡	95.12.27	遺構・遺物なし
7	盛岡市北夕顔瀬町 26-20	個人住宅建築	63㎡	98.05.12 98.05.20	時期不明溝跡2
試掘 8	盛岡市北夕顔瀬町 38	個人駐車場建築	4㎡	05.12.05	土坑1
9	盛岡市北夕顔瀬町 38	個人駐車場建築	126㎡	06.04.17 06.06.21	経塚1、近世土坑墓 27、時期不明溝跡1 経石（多字一石経、一字一石経）
				07.04.16 07.08.02	かわらけ、寛永通宝、煙管、手鏡 続縄文土器

第1表　宿田南遺跡調査成果一覧



第２図　宿田南遺跡全体図

Ⅱ．調査成果

1．検出された遺構と遺物

第９次調査　第９次調査区は遺跡西端に位置し、第３次調査区の西側に隣接している。調査期間は平成18年４月16日～６月21日と平成19年４月17日～８月２日で、調査面積は126㎡である。

２ヵ年にわたる調査の結果、礫石経塚１基、近世土坑墓27基、近世以前の溝跡１条、弥生～古墳時代の遺物包含層を検出した。

礫石経塚　経塚からは約38,000点の経石が出土している。そのうち判読および墨痕の認められる経石は186点である。経石の種類は、経文が両面に隙間なく書写された多字一石経と、片面と両面あるいは三面書写の梵字である。

土　坑　墓　土坑墓からは陶磁器・かわらけ・煙管・鏡・寛永通宝などの副葬品のほかに、漢字一文字を書写した一字一石経が出土している。

遺物包含層　経塚盛土直下より、弥生～古墳時代の遺物を含む黒色土層を確認した。

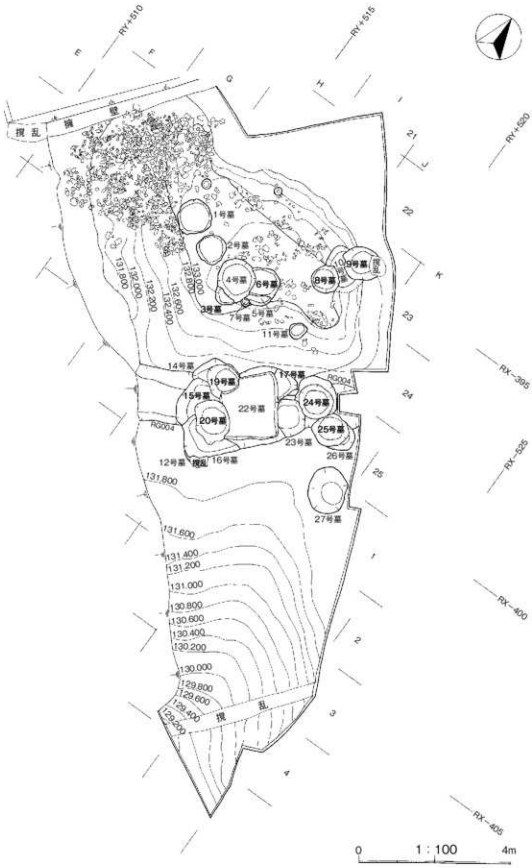
（1）．経　　塚

経塚は、盛土によるマウンドと経石を納めた主体部土坑の二つから構成されている。主体部土坑が経塚の中心と捉えると、現況の形は北～南西側の盛土および土坑の一部が削平されており、原形は留めていないと考えられる。また、マウンド上には近世墓が掘り込まれている。

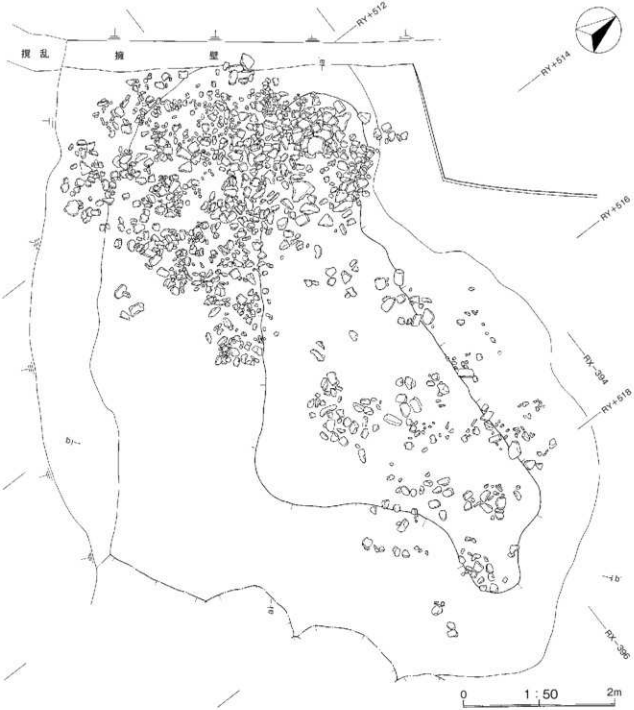
規　　模　現況の平面形は、不整三角形を呈し、主体部土坑は北西側の頂点部分に位置する。残存しているマウンドの規模は裾部分で北東―南西が6.3ｍ、北西―南東が7.4ｍをはかる。盛土の層厚は0.40～0.45ｍ、暗褐色土を主体とし、混合土（黄褐色地山層）の割合によって３層に細分される。Ａ２層、Ａ３層上面は硬く締まっており版築されている可能性がある。盛土中の遺物は、Ａ３層上面から出土した皇宗通宝１点のみである（第68図70、第５図版）。

主体部土坑　主体部土坑は北西側から東側にかけて、宅地および道路の切り土により削平されている。盛土によりマウンドを築いた後に、土坑を掘り込んでいる。規模は南北3.32ｍ、東西2.60ｍ以上、深さ0.9～1.0ｍの方形を呈していると考えられる。土坑内部はほとんど経石によって占められているが、礫の隙間には埋経後に雨水等により流れ込んだと考えられるしまりのない黒褐色土（Ａ層）が堆積している。底面には黄褐色土を含むしまりのある黒褐色土層が薄く堆積している（Ｂ層）。これは、土坑を掘り込む際にこぼれ落ちた旧表土が、作業中に踏み固められたものと考える。底面の東および南側には周溝が巡らされている。所謂、竪穴住居跡等の周溝と異なり、深さ３～５cm程度と極めて浅いが、判読できる経石が出土していることから、意図的に掘り込まれたものと考えられる。

土坑底面中央には深さ0.10～0.15ｍ、幅0.6～0.8ｍをはかる段差が掘り込まれている。西側が削平されているため原形は明らかでないが、溝状であったと考えられる。埋土は土坑底面と同じＢ層が堆積している。

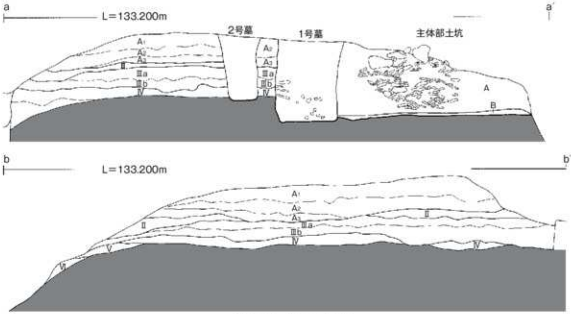


第３図　第９次調査区全体図

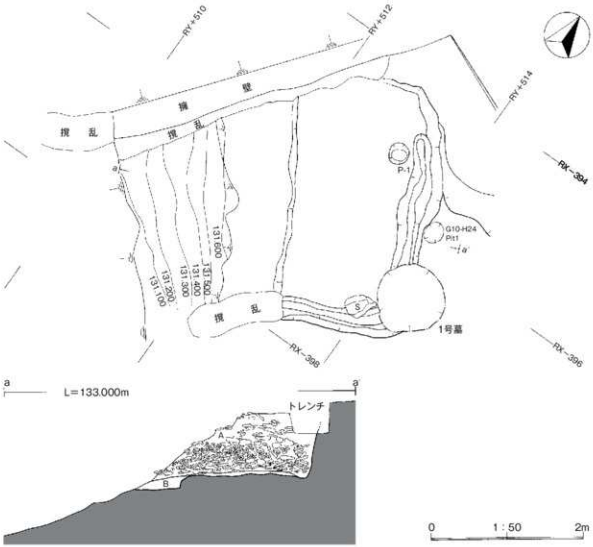


第４図　経塚平面図

礫の詰め方　経石は規則性を持って埋納されている。床面付近（L＝－1.1～0.9 m）は扁平な礫を敷き詰め、隙間に小礫を充填している。中間層（L＝－0.9～0.6 m）は、小礫をマウンド状に積み上げ、その周りに扁平な礫を詰めている。最上層（L＝－0.6～0.3 m）は扁平な礫を詰めている。壁際の礫は壁に沿って縦置きされているものもあるが、多くの礫は底面に対して水平に置かれている。扁平な礫が、東隣の礫に若干重なるように置かれていることから、経石は土坑の東側から順次並べられたと考えられる。



第５図　経塚断面図



第６図　経塚主体部土坑

（2）．経石

土坑内部より出土した経石の総数は38,252点を数える。その中で文字が判読できる、または、墨書痕が認められる経石は186点である（第2表）。経石を取り上げる際には、土坑の壁の向きに合わせて、2ｍグリッドを1×1ｍに四分割にした任意グリッド（A①～D④）を設定し、基準点を設けた（第7図）。経石は1点ずつ両面の墨痕を確認しながら取り上げた。その際、墨痕の確認できた経石は、出土位置が分かるように基準点からのＸＹ座標および基準標高値（L＝133.000ｍ）からの深さを記入した。現場段階で見落として洗浄時に墨痕が確認できた経石は任意グリッドと深さのみを記入した。墨痕のある経石は出土したグリット毎に番号を付けた。取上げ時の座標と標高値を基に、経典および梵字の種類が判明した経石の空間分布図を作成した（第8図）。

経石は大きく分けると、経典が書写されたもの、梵字（種子）が書写されたもの、梵字（金剛界五仏）が書写された3種類に分類される。そのうち、経典または梵字の種類が判明した105点を図示した（第9～56図）。挿図は以下の要領で作成した。

挿図作成要領　文字は肉眼および赤外線写真を活用し、判読した。図に掲載した写真はすべて赤外線撮影によるものである。経典の特定にあたっては、大蔵経テキストデータベース研究会製作の「大正新脩大蔵経テキストデータベース」を活用した。

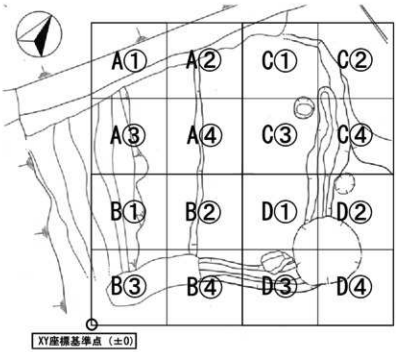
経石は基本的に原寸で掲載し、特に大きいものだけに縮小率を記した。釈文は判読できた字のみを掲載し、判読できないが字数がわかる部分は「□□□」で示し、字数が推定できない部分については、□で示した。文字の推定できる部分は、□で囲った。経典に掲載されているが、経石文中では欠落している脱字は○で囲い、逆に経典に掲載されていないが、経石文中にある衍字は（ ）で示した。経石は妙法蓮華経、金剛般若波羅蜜経（以後、金剛経と呼称）、梵字（種子）、梵字（金剛界五仏）の順に掲載した。

経石の分布　主体部土坑の半分以上が削平されているため、経石の分布については部分的な報告とならざるを得ないが、礫の並べ方と同様に書写内容によって置く場所に一定の規則性が見られるようである。

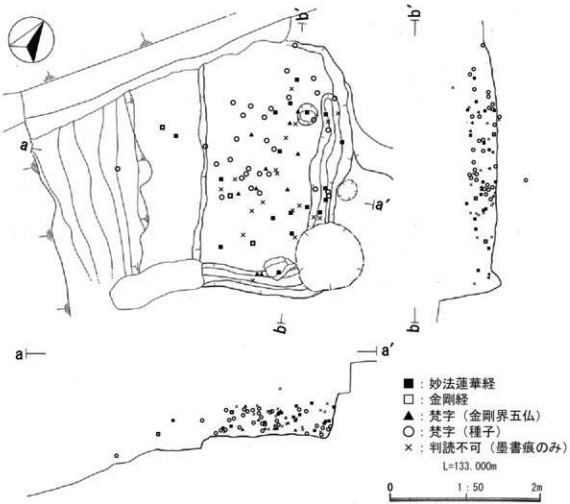
判読できた経石の大半は中間層（L＝－0.9～0.6ｍ）以下から出土している。最上層（L＝－0.6～0.3ｍ）からも出土しているが、ほとんどは墨痕のみで判読できる経石は少ない。これは最上層に経典を書写した経石を納めなかったわけではなく、土坑内に浸入した雨水の影響により、経文が消失する割合が多かったものと推測する。

平面分布をみると、梵字が書写された経石は土坑中央部に比較的多く集中しており、壁面近くに分布しているものもあるが、その数は少ない。断面図においては、前述した小礫の詰め方と同様にマウンド状に近い分布を示している。

経典の書写された経石は平面・断面ともに、梵字の経石を取り囲む様に分布している。これもやはり、前述した扁平な礫の詰め方と同じ分布である。また、判読できなかった経石の大半は扁平な礫で、数行にわたって墨痕が残っている。本来は経典が書写されていたと考えられ、それを裏付けるように経典書写の経石と同様の分布をしている。



第７図　経塚主体部　グッリド配置図



第８図　経塚主体部　経石出土状況

経石10 面１ (S=2/3)

面1

□□□

経石10 面2 (S=2/3)

面2

・前半、十数行あるが判読不可

眉間□□□千東方万

□見文殊諸□

出(法)音教諸

因縁以無量

□際若人有福□

説浄道文殊□□□□此見

当略説我□□□□苦

施金銀瑠璃珠摩尼

車衆寶瓔珞奥歓喜

□得是乗三界

(妙法蓮華経　巻一　序品第二)

第10図　経石10（2）

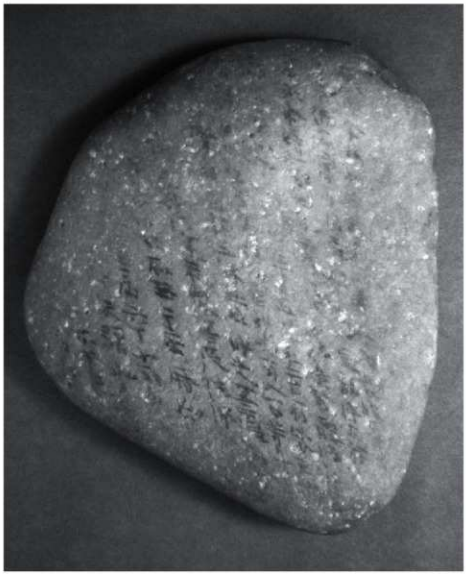
経石41　面1

面1

或有諸比丘在於
行施忍辱等
定身心寂不動以求無
各於民国士説法求仏道爾時
其心皆歓喜各自相問是事何
□讃妙光菩薩汝為世間眼一切所
汝能證知世尊既讃歎令妙光
起於此座所説上妙法是

（妙法蓮華経　巻一　序品第一）

第11図　経石41



経石95　面1

面1
爾時　□諸仏土無□
□□□仏
□□爾時　□薬欲聴法□
□　未曾有欲□
□　有八百弟子
□　從三昧起因妙光菩薩□□
□　菩薩善薩法仏□
□　不起于高時會
□　処六十小劫□
□　説謂如
□　衆中無

（妙法蓮華経　巻一　序品第一）

第12図　経石95

経石130 面2

経石130 面1

面1
悪業縁
受報好醜於此悉見又聞諸仏聖主師子演説
経典微妙第一其聲清浄出柔軟音教諸

面2
菩薩無数億万梵音深妙令人楽聞各於
世界講説正法種種因縁以無量喩照明仏
法開悟衆生若人遭苦厭老病死為説
涅槃尽諸苦際若人有福曾供養仏
志求勝法為説縁覚若有仏子修種種行
求無上慧為説浄道文殊師利我住於此見
聞若斯及千事如是衆多今
当略説我見仏恆沙菩薩種種因縁
而求仏道或有行施金銀珊瑚真
珠摩尼碼碯金剛諸珍
奴婢車乘寶飾輦輿歓喜
布施迴向仏道願得是乘

（面1・面2ともに妙法蓮華経　巻一　序品第一）

第13図　経石130（1）

経石130 面5

経石130 面3

経石130 面4

面3
□□□諸仏所□□□□□

面4
騏馬寶車欄楯華蓋

面5
軒飾布施復見菩薩身内手□
及妻子施求無上道又見菩薩頭目
身體欣楽施與求仏智慧文殊師利
我見諸王往詣仏所問無上道便捨樂
土宮殿臣妾剃除鬚髮而被法服
爾時世尊告比丘僧[illegible]
[illegible]
[illegible]又見菩薩安慰□□
[illegible]
又□□□定慧具足以無量喩
□□講法欣□□□化諸菩

（面3・4・5ともに妙法蓮華経　巻一　序品第一）

第14図　経石130（2）

経石142 面1 (S=2/3)

面1
・前半数行判読不可
己利□
若薩如□要優□
那悩迦葉仏
阿□駄劫寄悉梵設摩
□□□薄拘羅摩訶拘羅難陀
□□□□子須菩提阿難羅如是衆
□□□□千人摩訶波闍波提比丘尼與眷屬六千人俱羅羅□
輪陀羅比丘尼
菩薩摩訶薩八万人□□□□□□□□□退轉菩提
衆悪本
開無量
・後半二行判読不可

（妙法蓮華経　巻一　序品第二）

第15図　経石１４２

経石104 面2

経石104 面1

面1
妙法蓮華経序品第一
如是我聞一時仏住王舎城耆闍崛山中與大比丘衆万二
千人俱皆是阿羅漢諸漏已尽無復煩悩逮得己利尽諸有結心得自
在其名曰阿若憍陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦葉伽耶迦葉
（妙法蓮華経　巻一　序品第一）

面2
速得仏不文殊師利言有娑竭羅龍王女年始八歳智慧
利根善知衆生諸根行業得陀羅尼諸仏所説甚
深秘蔵悉能受持深入禪定了達諸法於刹
那頃発菩提心得不退轉辯才
無礙慈念衆生猶如赤子
功徳具足心念
口演微妙
広大
（妙法蓮華経　巻五　提婆多達品第十二）

第16図　経石１０４（１）

経石104　面5

面3
慈□□謙志意和雅

面4
能至菩提智積菩薩

面5
言我見釈迦如来於無量劫難行苦
行積功累德求菩提道未曾止息觀三
千大千世界乃至□□□捨身命□□衆生故然後乃得成菩
提道不信此女於□□覺言□
時龍王女忽現於前□□
以偈讚曰深□

（面3・4・5ともに妙法蓮華経　巻五　提婆多達品第十二）

経石104　面3

経石104　面4

第17図　経石１０４（２）

経石148 面1

面1

種種法門宣

□□□□

□□□□

貧窮

五欲如牛

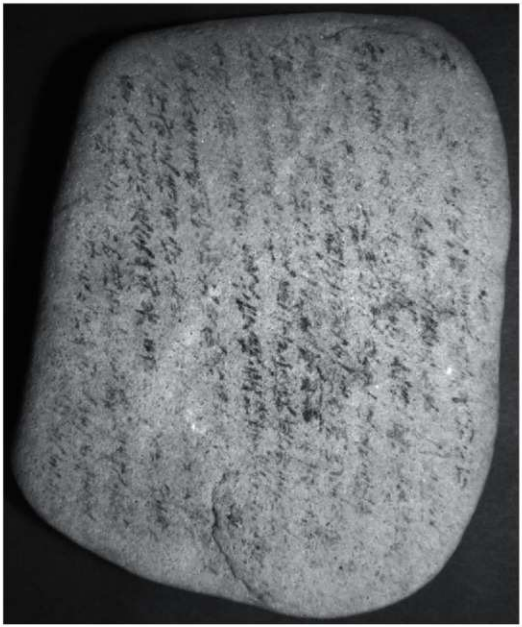
（妙法蓮華経　巻一　方便品第二）

第18図　経石148

経石62　面１

面１
・前半三行あるが判読不可
□□□□汝若不取後必憂怖□
□□□□遊戯汝等於此火宅宜速出来□
□□□□開父所説珍玩之物適其願故心各□
□□□出火宅是時長者見諸子等安□
（妙法蓮華経　巻二　譬喩品第三）

第19図　経石６２



経石125　面１

面１
・前半７行あるが判読不可

□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□

経石13 面1

面1
応去応度若□□
但聞一仏乗者則□□□
不欲親近便作是念仏道
長遠久受勤苦乃可得成仏知是
心怯弱下劣以方便力而於中道為止
息故說二涅槃若衆生住於二地如来
爾時即便為說汝等所作未辦汝所住地近
於仏慧当観察籌量所得涅槃
□□□但是如来方便之力
□□一□□□說三如彼導師
□止息故化

（妙法蓮華経　巻三　化城喩品第七）

第21図　経石13

経石55 面1

面1
仏告諸比丘大通智勝仏
得阿耨多羅三藐三菩提時
十方各五百万億諸仏世界六種
震動其国中間幽冥之処日月威
光所不能照而皆大明其中衆生
各得相見咸作是言此中云何忽
生衆生又其国界諸天
宮殿乃至梵宮
六種震動大光
普照遍

経石55 面2

面2
□□□勝諸
天光瞑時東
□□□万億諸
国土中梵□□□□□是念
今者宮□□□苦所未有以
何因緣而現□相是時諸梵
天王即各□□彼
衆中有一大梵
一切為諸□□□
偈言

（面1・2ともに妙法蓮華経　巻三　化城喩品第七）

第22図　経石55

経石74 面1

面1
動其
照而皆
浮此中
宮殿
普照[illegible]勝諸
万億諸国土中
嘿倚於

（妙法蓮華経　巻二　化城喩品第七）

第23図　経石７４

経石144 面1 (S=2/3)

面1

・前半二行判読不可

□無有仏三悪道□□諸天□□

□今仏出於世為衆生作眼目□

於□切為衆生之父哀愍饒□

□慶今得値世尊曾時諸梵天王偈讃仏已各作是言

□□□尊哀愍一切縛於法輪度衆生時諸梵

天歓喜□　大聖縛法輪脱衆生苦惱示諸法相度苦惱衆生令得

□□□許□又請比丘南方五(百)百万億国土諸大梵王各自見宮

□□□□羅雖昔所未有歓喜踊躍生希有心即各相詣共議此事

宮殿有□□時彼衆中有一大梵天王名曰妙法為諸

□□我(詣)宮殿□□□□羅此非無因緣是相宜求之

□曾見是相為大徳天生迦出世間曾時五百万億□

□奥宮殿俱各以衣盛諸華共詣彼方推尋是相見大通

□場菩提樹下師子座北方推尋是相見大通

□伽人座□　乾闥婆聚

□及見十六王子讃仏

□百千□

・一行判読不可

□弥山井以供□

(妙法蓮華経　巻三　化城喩品第七)

第24図　経石１４４

経石156　面2

経石156　面1

面1
十六菩薩常楽
□□西化六百万億
所生東菩薩供　値四百万億
諸仏世尊　十六沙弥今
皆得□三藐三
・後半四行判読不可

面2
二仏一名阿弥陀二名度一切
世間苦悩西北方二仏一名多
摩羅跋栴檀香神
（面1・2ともに妙法蓮華経　巻三　化城喩品第七）

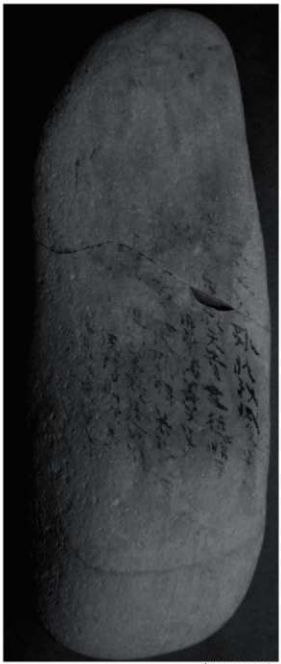
第25図　経石156

経石162　面1

面1
尊欲重宣此義□大通智勝仏十劫坐道場仏法不
現前不得成仏道□養彼仏
諸天擊天鼓□過十□□已乃得
成仏道□脊□千万億
・後半数行あるが判読不可

（妙法蓮華経　巻三　化城喩品第七）

第26図　経石162



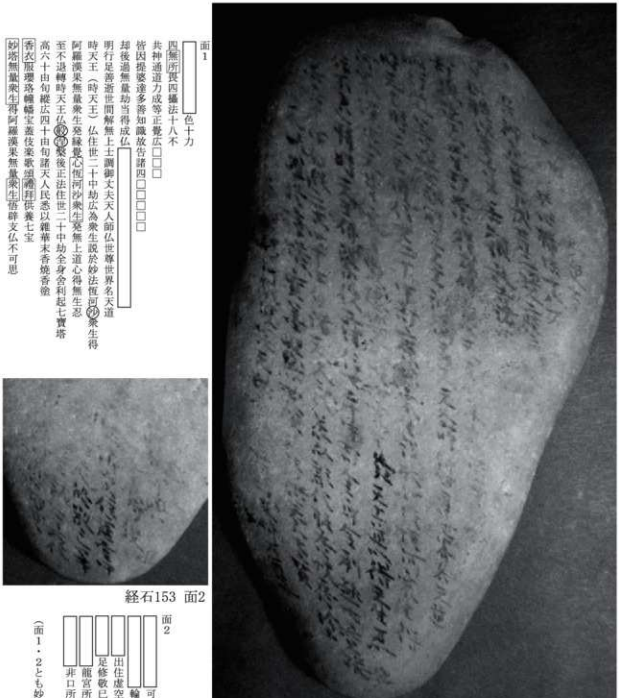
経石111　面1

面1

□□□□□□□□□為滅於我滅後
□□□□□□□□□於無量士從始至
□□□□□□□□□仏身諸善男子
□□□□□□□□□此経難持若□
□□□□□□□□□是則勇猛是則
□□□□□□□□□世讃持此経是
□□□□□□□□□諸天人世間之

（妙法蓮華経　巻四　見寶塔品第十一）

第27図　経石１１１



経石153 面1

経石153 面2

面1

□色十力
因無所畏因緣法十八不
共神通道力成等正覺広□□
皆悉通達婆逢多薄知識故告諸四□□□□□
却後過無量劫当得成仏□□□□□
明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊世界名天道
時天王（時天王）仏住世二十中劫広為衆生説於妙法河沙衆生得
阿羅漢果無量生発菩提心恒河沙衆生発無上道心得無生忍
至不退轉時天仏滅後正法住世二十中劫全身舎利起七寶塔
高六十由旬縱広四十由旬諸天人悉以雑華末香燒香散
香衣覆瓔珞幡蓋宝蓋伎樂歌頌禮拜供養七宝
妙塔無量衆生得阿羅漢果無量衆生皆辟支仏不可思

面2

可與
輪俱
出住虚空中
是修敬已暴
龍宮所化
非口所宜

（面1・2とも妙法蓮華経　巻五　提婆達多品第十二）

第28図　経石153

経石157　面2

経石157　面1

面1

□□□□所說法悪口而
□□□□□如是等衆悪念仏
□□□□□□我皆到其
□□□□□□□是世尊使処衆無所畏我
□□□□□□□□建栴檀十方仏発如是誓言仏自知我心
□□□□□□□□□行山第十四爾時文殊師利法王子菩薩摩訶
□□□□□□□□□□世尊是諸菩薩甚為難有敬順仏故発大誓
□□□□□□□□□□□說是法華経世尊菩薩摩訶薩
□□□□□□□□□□□□仏告文殊師利者菩薩摩訶薩於後
□□□□□□□□□□□□□□□菩薩摩訶薩
□志尊地柔和善
□□□卒慈心亦不驚

〔妙法蓮華経　巻五　勧持品第十三・安楽行品第十四〕

面2

又復於法無所行而□□□□□□□□□□□□□□□

経石181　面1

経石31　面1

面1

□[修]習何仏道
如是諸菩薩
神通大智力
踊出世尊□
□乃不識□
從地出願說其因緣今此
是諸菩薩等
無量德世尊[唯願]決衆□
□諸實樹
□□

（妙法蓮華経　巻五　從地涌出品第十五）

面1

不及其□□
子善女人□
三菩提道者□
義而□□
□□□

（妙法蓮華経　巻六　分別功德品第十七）

第30図　経石31・181

経石60　面1

面1
・前半三行判読不可

至于□分別之如有
□□□□総無量衆其滅□□□随意
□□□面聚説
□□□其死不久我今応
□□□尋於道果即為方
□□□涅槃実法□□
□□□如水沫泡□
□□□応当

（妙法蓮華経　巻六　随喜功徳品第十八）

第31図　経石６０

経石97　面1

面1
・前半一行判読不可
四衆之中有生
從何所来自□□
・後半数行判読不可
（妙法蓮華経　巻七　常不軽菩薩品第二十）

第32図　経石９７

面1

・前半一行判読不可

[　　]合掌瞻仰尊顔而白仏言世尊我等於仏滅後
世尊分身所在国土滅度之処当広説此経所以者何我等
亦自欲得是(異)浄大法受持讀誦解説書写而供養之爾時
世尊於文殊師利等無量百千万億舊住娑婆世界菩薩
摩訶薩及諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷[　　]

（妙法蓮華経　巻七　如来神力品第二十一）

経石43　面1

第33図　経石４３

経石135　面1

面1
釈迦牟尼仏令十方来
□□□□□還本土而作是言
多寶仏塔遶□□故説是
□□十方無量分身諸仏坐寶樹下師子座上者
及多寶仏并上行等無辺阿僧祇菩薩大衆舎
利弗等聲聞四衆及一切世間天人阿修羅等聞仏所説皆大歓喜
妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三爾時宿王華智菩薩白仏言
世尊薬王菩薩云何遊於娑婆世界世尊是薬王菩
薩有若干百千万億那由他難行苦行善哉世尊
願少解説諸天龍神夜叉乾闥婆阿修羅迦樓
羅緊那羅摩睺羅伽人非人等又他国土諸来
菩薩及此聲聞衆聞歓喜爾時仏告宿王華　↑一行抜け
菩薩乃往過去無恆河沙劫有仏
號日月浄明徳

〔妙法蓮華経　巻七　嘱累品第二十二〕
〔妙法蓮華経　巻七　薬王菩薩本事品第二十三〕

面2
・墨痕のみ。判読不可

第34図　経石135

経石108　面1

面1
・前半、四行判読不可
□□
□□
聽法不〇問訊多寶
不久滅度
見不善心不獲五情不世尊衆生能
悲
忍不衆□
問□

（妙法蓮華経　巻七　妙音菩薩品第二十四）

第35図　経石１０８

経石170　面1

面1
・前半三行判読不可
乃至夢中亦復莫惱
不順我呪惱亂説法者頭
父母罪亦如順油秡ニ
此法師者当獲如是殃諸羅刹女
尊我等亦当身自擁護受持□□
修行是経者令得安穏□□□□
衆毒薬仏告諸羅刹
等但能擁

（妙法蓮華経　巻八　陀羅尼品第二十六）

第36図　経石１７０

経石101　面1（S＝2/3）

面1

是十羅
□□□

経石101 面2（S＝2/3）

面2
□□□是法師
説是陀羅尼品時六万八□
□法忍妙法蓮華経妙荘厳□□□
□十七劫時□世過
無量無辺不□

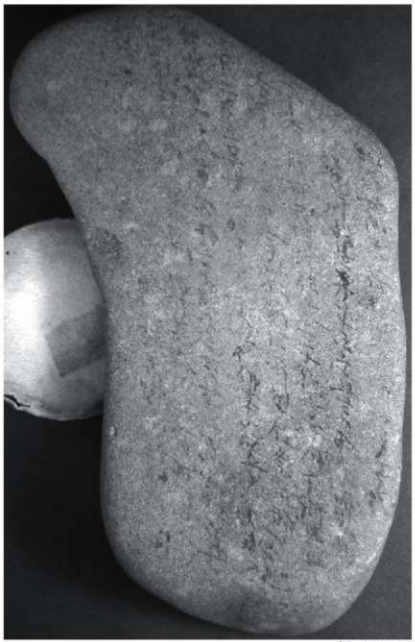
・中間一十数行判読不可

□者何此仏於一切天人
□説法華経宜応□□□
□杏子含孜父
□再法汝等

（妙法蓮華経　巻八　陀羅尼品第二十六）
（妙法蓮華経　巻八　荘厳王本事品第二十七）

第38図　経石１０１

経石159　面1



経石77　面1

面1
於一切世間天
□我是弟子文語子言我今亦□□
□□可□□□於是二子從空中下到其母所
合三菩提□堪任発阿耨多
所出家修道實時二子□作仏事聞見聴於彼仏

・検半、二行判読不可

〔妙法蓮華経　巻八　妙荘厳王本事品第二十七〕

面1
受持□
□□□□□□□
得其福報若有□□
□是行終無所□□
□無眼若□□

〔妙法蓮華経　巻八　普賢菩薩勸発品第二十八〕

第39図　経石77・159

面1

□□何降□
善哉善哉□

経石6 面1

面2

□伏其□
□樂欲聞
□菓正宗□第三
□□須菩提請菩
□薩應□是降
□有一

（面1・2ともに金剛経）

経石6 面2

第40図 経石6

面1

□是等七寶聚
□若人以此般若波
乃至四句偈等受持
他人說於
一百千萬
數譬
化分第

経石124 面1

面2
・前半数行判読不可

□者
□有
提如來
有我而

（面1・2ともに金剛経）

経石124 面2

第41図　経石１２４

面1

・一行判読不可

□□世尊面説偈言

□以色我以音聲

□□是人□□□

経石34 面1

面2

□念如來□

□相故得□

□菩提□

□是念□

（面1・2ともに金剛経）

経石34 面2

第42図　経石１２４

経石22

経石9

経石7

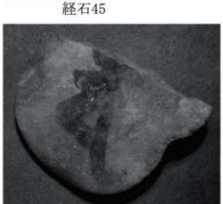
経石1

経石45

経石30

経石24

経石14


経石56

経石53

経石49

経石48

・すべての経石に𑖌が書写されている。

第43図　経石1・7・9・22・14・24・30・45・48・49・53・56

経石114

経石89

経石88

経石83

経石127

経石91

経石68

経石36

経石122

・83～127は[illegible]が書写されている。

・36～167は[illegible]が書写されている。

経石167

経石154

経石103

第44図　経石83・88・89・114・122・127・36・68・91・103・154・167

面2

経石4
面1

面2

経石2
面1

面2

経石17
面1

面2

経石15
面1

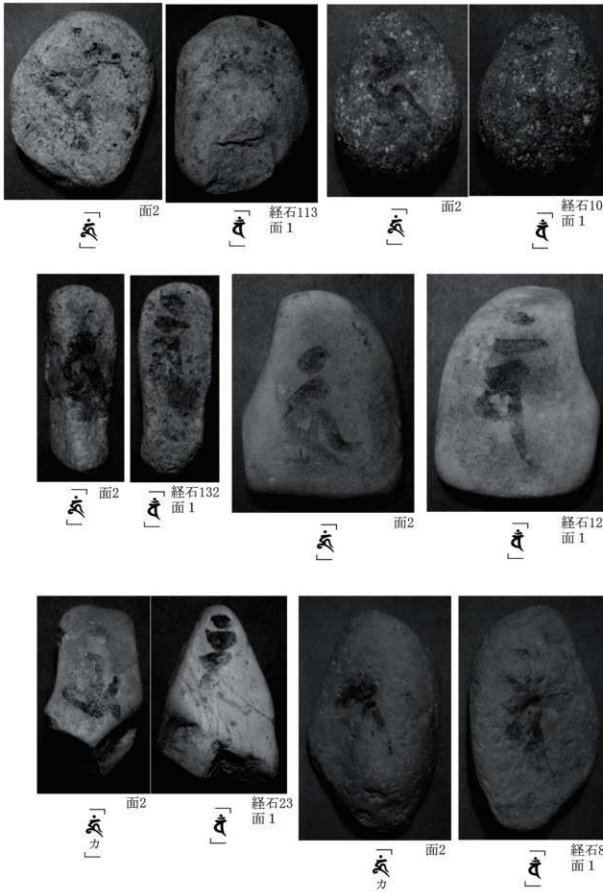
面2

経石90
面1

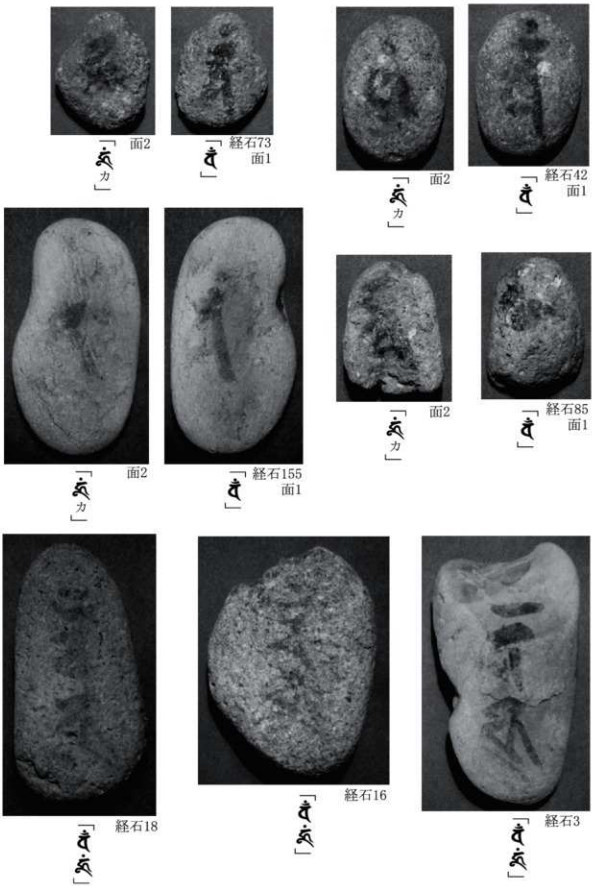
面2

経石38
面1

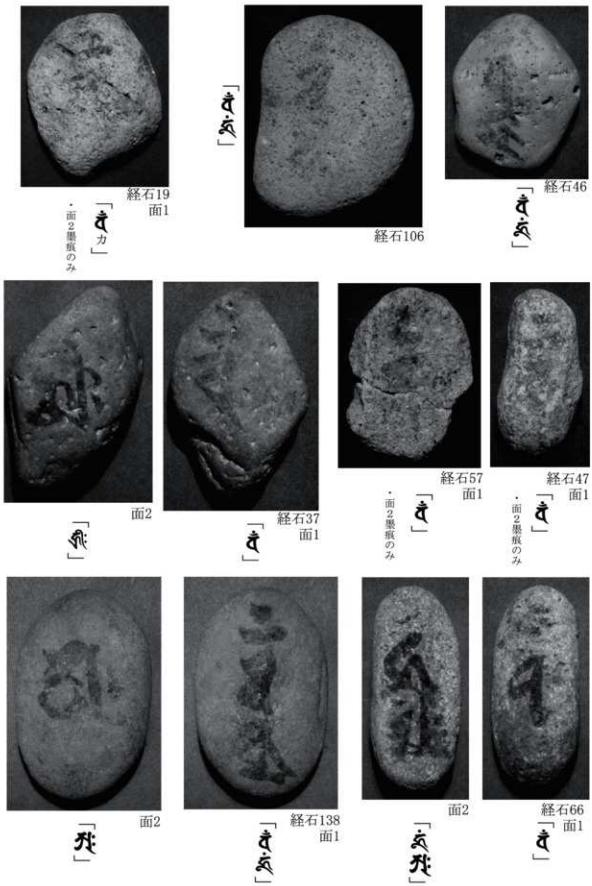
第45図　経石2・4・15・17・38・90



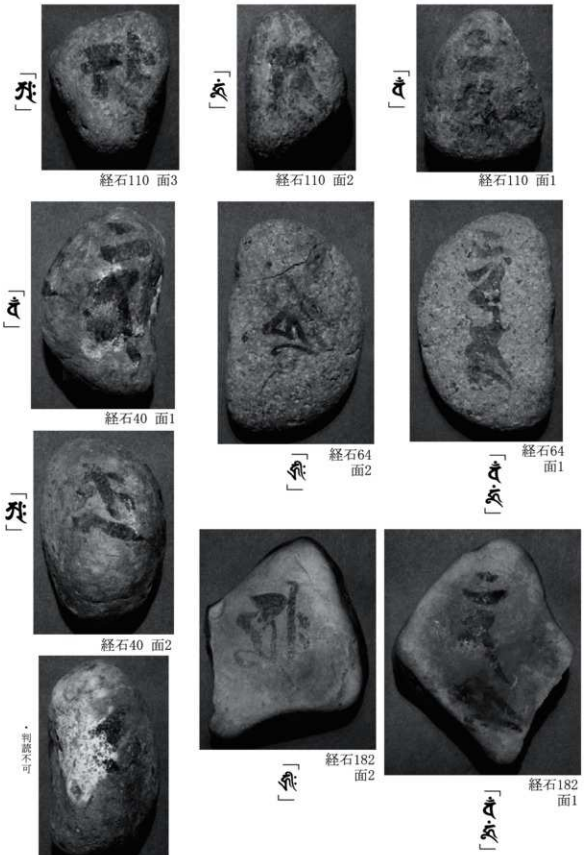
第46図　経石１０５・１１３・１２３・１３２・８・２



第47図　経石42・73・85・155・3・16・1



第48図　経石46・106・19・47・57・37・66・138



第49図　経石１１０・６４・１８２・４０

「□ボ」

経石126 面3

「ボ」

経石126 面2

「ボ」

経石126 面1

「ボ」

・面2墨痕のみ

経石92 面1

「ボ」

・面2墨痕のみ

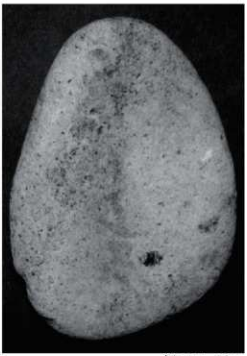
経石27 面1

「ボカ」

・面2墨痕のみ

経石79 面1

第50図　経石126・27・92・79



「□□」

・面2判読不可

経石44 面1

「□□カ」

経石5 面1

「南无大日如来」

経石5 面2

第51図 経石44・5

経石29 面2

経石29 面1

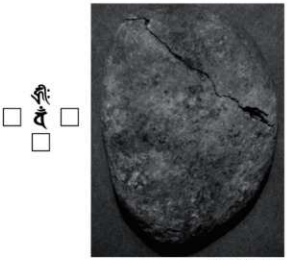
経石26 面1

経石54 面1

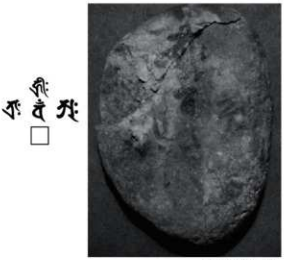
経石52 面2

経石52 面1

第52図　経石２６・２９・５２・５４



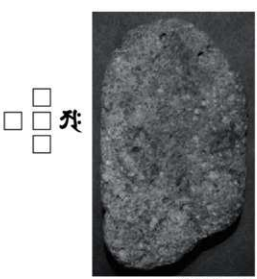
経石69 面2



経石69 面1

経石70 面2

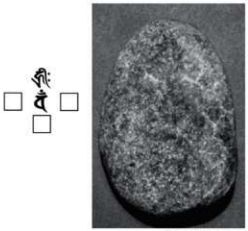
経石70 面1



経石81 面2

経石81 面1

第53図　経石69・70・81



経石128 面2

経石84 面1

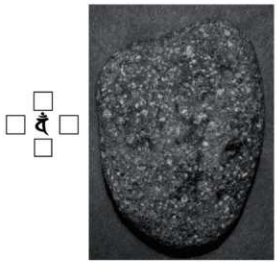
経石87 面2

経石87 面1

経石93 面2

経石93 面1

第54図　経石８４・８７・９３・１２８



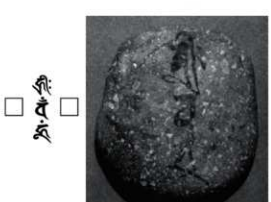
経石131　面2

経石131　面1

経石161　面2

経石161　面1

経石171　面2



経石171　面1

第55図　経石131・161・171

経石168 面

経石160 面1

第56図　経石１６０・１６８

No.	平面位置	基準点からの座標		深さ（m）	法量（cm）			重量（g）	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
		X（m）	Y（m）		長軸	短軸	厚さ				
1	A ②			床面	4.7	3.9	1.7	31	1		『𑖀』バン
2	A ②	3.03	1.84	1.04	4.3	2.8	2	32	2		面１『𑖀』バン　面２『𑖌』ウーン
3	A ②			0.9～1	7.1	3.5	1.8	51	1		『𑖀𑖌』バン・ウーン
4	A ③	2.16	0.29	1.36	4.5	3.8	1.7	33	2		面１『𑖀』バン　面２『𑖌』ウーン
5	A ③			1.1～1.2	11.6	3.8	1.5	97	2		面１『𑖀𑖌𑖨𑖿𑖨𑖽』　面２『南无大日如来』
6	A ③	2.69	0.92	1.06	11.1	9.4	2.3	338	2		金剛経
7	A ③			1～1.1	6.8	3.5	1.7	52	1		『𑖀』バン
8	A ④			床面	6.1	3.5	2	58	2		面１『𑖀』バン　面２　不明
9	A ④	1.23	1.65	1.09	4.3	2	1.8	24	1		『𑖀』バン
10	A ④	2.02	1.7	1.03	20.3	14.4	2.2	840	2	A2	序品第一
11	A ④			1～1.05	10.7	7.2	1.8	181	2		判読不可
12	A ④			1～1.05	13.1	9.8	1.9	417	1		判読不可
13	A ④	2.58	1.1	0.9	13.5	8.8	2.2	372	1		化城喩品第七
14	A ④	2.45	1.49	0.89	4	2.5	1.3	13	1		『𑖀』バン
15	A ④	2.55	1.87	0.89	3.7	3.6	1.5	31	2		面１『𑖀』バン　面２『𑖌』ウーン
16	A ④	2.87	1.97	0.87	6	4.4	2.1	55	1		『𑖀𑖌』バン・ウーン
17	A ④	2.04	1.96	0.82	4.3	3.4	1.6	36	2		面１『𑖀』バン　面２『𑖌』ウーン
18	A ④			0.8～0.9	6.9	3.5	2.1	68	1		『𑖀𑖌』バン・ウーンか？
19	A ④			0.8～0.9	4.6	3.3	1.6	21	2		面１『𑖀』バンか？　面２　不明
20	A ④			0.8～0.9	8	5.3	1.7	77	1		判読不可
21	A ④			0.8～0.85	8.9	5	2	118	1		判読不可
22	A ④			0.8～0.85	5.1	3.8	1.9	53	1		『𑖀』バン
23	A ④			0.8～0.85	4.3	2.9	2.1	37	2		『𑖀𑖌』バン・ウーンか？
24	A ④	2.27	1.79	0.76	3.8	4.2	1.3	25	1		『𑖀』バン
25	A ④	2.01	1.88	0.73	6.1	1.7	2.6	34	2		判読不可
26	A ④			0.7～0.8	5.7	3.7	1.8	54	1		金剛界五仏
27	A ④			0.7～0.8	5.9	4.4	2.1	63	2		面１『𑖀𑖌』バン・ウーン　面２　不明
28	B ②	1.91	1.72	1.07	8.4	12.5	2.1	260	2		判読不可
29	B ②	1.82	1.91	1.04	6.8	5.2	1.5	71	1		金剛界五仏
30	B ②	1.77	1.7	1.04	5.5	4.8	2.3	53	1		『𑖀』バン
31	B ②	1.12	1.7	0.98	10.3	6.8	1.5	167	2		従地涌出品第十五
32	B ②	1.3	1.97	0.82	14.6	5.7	2.2	345	1		判読不可
33	B ②			0.8～1	12.1	6.4	1.4	218	1		判読不可
34	B ②	1.78	1.8	0.79	10	8.5	2.3	227	2	A2a2	金剛経
35	C ①			床面	8.4	6	1.2	108	2		判読不可
36	C ①	3.12	2.56	0.98	4.8	3.3	1.8	31	1		『𑖌』ウーン
37	C ①	3.77	2.63	0.93	5.3	3.4	2.5	57	2		面１『𑖀』バン　面２『𑖨』キリーク
38	C ①			0.8～0.9	3.8	2.7	2.3	23	1		面１『𑖀』バン　面２『𑖌』ウーン
39	C ①			0.8～0.9	18.2	10.9	3.1	977	1		判読不可
40	C ①			0.8～0.85	5	3.3	3.2	45	3		面１『𑖀』バン　面２『𑖨』アク　面３　不明
41	C ①	3.01	2.6	0.8	15.4	10.1	2.2	667	1		序品第一
42	C ①	3.16	2.98	0.78	3.9	2.8	1.8	28	2		面１『𑖀』バン　面２　不明
43	C ①	3.33	2.67	0.78	17	6.3	1.5	356	1		如来神力品第二十一
44	C ①	3.45	2.55	0.77	8.3	5.9	1.5	89	1	B1	『𑖀□𑖌𑖨□』バン？・ウーン・タラーク・？
45	C ①	3.37	2.91	0.75	6.2	2.2	1.2	21	1		『𑖀』バン
46	C ①			0.7～0.8	4.2	3.4	1.7	29	1		『𑖀𑖌』バン・ウーンか？
47	C ①			0.7～0.8	4.4	2.3	1.8	18	2		面１『𑖀』バン　面２　不明
48	C ①			0.7～0.8	4.3	2.8	1	13	1		『𑖀』バン
49	C ①			0.7～0.8	3.8	2.9	0.8	14	1		『𑖀』バン
50	C ①			0.7～0.8	17.4	9.7	3.1	692	1		判読不可
51	C ①	3.22	2.63	0.5	10.2	6.7	1.5	189	1		判読不可
52	C ①			－	6.5	4	1.5	49	2		金剛界五仏
53	C ①			－	4.3	1.9	1.1	8	1		『𑖀』バン
54	C ①			－	5.1	4.2	1.1	42	2		金剛界五仏
55	C ①			－	8.9	8.7	1.7	195	2		化城喩品第七
56	C ②	3.1	3.19	0.98	3.8	4.8	1.4	25	1		『𑖀』バン
57	C ②			0.9～1	4.5	3.3	1	14	2		面１『𑖀』バン　面２　不明
58	C ②			0.7～0.8	7.9	5.7	1.8	108	2		判読不可
59	C ②			0.6～0.7	6.2	7.6	1.9	91	2		判読不可
60	C ②			－	11.5	10.6	1.3	290	2		随喜功徳品第十八
61	C ②			－	12.5	9.7	3.3	647	1		判読不可
62	C ②			－	16.3	10	1.7	385	1		譬喩品第三

第２表　経石計測一覧１

No.	平面位置	基準点からの座標		深さ（m）	法量（cm）			重量（g）	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
		X（m）	Y（m）		長軸	短軸	厚さ				
63	C ②			－	14.1	12.4	1.4	414	2		判読不可
64	C ②			－	5.8	3.7	1.9	58	2		面１『𑖤𑖨』バン・ウーン　面２『𑖨』キリーク
65	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
66	C ③	2.8	2.92	1.13	5.3	2.4	1.6	27	2		面１『𑖤』バン 面２『𑖨𑖩』ウーン・アク
67	C ③			1.05 ～ 1.1	17.1	8.2	3.5	644	1		判読不可
68	C ③	2.96	2.36	1.03	4.8	3.9	2.7	54	1		『𑖨』ウーン
69	C ③	2.35	2.68	1.03	6.2	4.5	1.9	68	2		金剛界五仏
70	C ③	2.16	2.26	1	5.1	3.7	1.4	31	2		金剛界五仏
71	C ③			1 ～ 1.05	16.8	11.5	2.4	902	1		判読不可
72	C ③			1 ～ 1.05	3.8	4.3	1.8	39	1		判読不可
73	C ③	2.99	2.07	0.99	3.2	2.4	1	12	2		面１『𑖤』バン　面２『𑖨』ウーンか？
74	C ③	2.38	2.47	0.99	16.3	7.2	2.6	385	1	A1	化城喩品第七
75	C ③	2.56	2.55	0.97	12.5	8.6	2	339	1		判読不可
76	C ③	2.73	2.67	0.96	15.3	12	3.5	1150	1		判読不可
77	C ③	2.92	2.39	0.93	16.3	9.2	3	761	2		荘厳王本事品第二十七
78	C ③			0.9 ～ 1	13	10.4	5.1	1040	1		判読不可
79	C ③	2.52	2.27	0.86	4.9	3.3	2.1	51	2		面１『𑖤𑖨』バン・ウーンか？　面２　不明
80	C ③	2.13	2.45	0.86	10.2	10.6	1.6	359	1		判読不可
81	C ③	2.9	2.69	0.86	6.6	3.9	1.5	44	2		金剛界五仏
82	C ③			0.85 ～ 0.9	10.3	9	2	226	2		判読不可
83	C ③	2.08	2.18	0.81	4.9	4.7	1.5	32	1		『𑖤』バン
84	C ③			0.8 ～ 0.9	5.7	4.3	1.6	48	1		金剛界五仏
85	C ③			0.8 ～ 0.9	3.5	2.5	1.5	16	2		面１『𑖤』バン　面２　不明
86	C ③	2.1	2.46	0.78	5.8	1.9	1.3	27	1		判読不可
87	C ③	2.75	2.58	0.77	6.2	5.4	1.5	69	1		金剛界五仏
88	C ③	2.15	2.04	0.77	5.5	2.5	1.1	17	1		『𑖤』バン
89	C ③	2.41	2.39	0.77	3.7	2.8	1.9	25	1		『𑖤』バンか？
90	C ③	2.84	2.25	0.76	4.6	4.5	1.4	41	2		面１『𑖤』バン　面２『𑖨』ウーン
91	C ③	2.1	2.01	0.75	5.9	2.6	2	40	1		『𑖨』ウーンか？
92	C ③	2.07	2.27	0.74	6	4.8	1.2	50	2		面１『𑖤𑖨』バン・ウーン　面２不明
93	C ③	2.65	2.12	0.73	6	4	1.1	35	2		金剛界五仏
94	C ③			0.7 ～ 0.8	7.2	8.8	1.9	164	1		判読不可
95	C ③	2.9	2.82	0.7	12.3	10.5	2.5	396	1		序品第一
96	C ③			0.6 ～ 0.7	22.6	13	4.3	1930	1		判読不可
97	C ③			0.6 ～ 0.7	14.8	10.3	2.5	507	1		常不輕菩薩品第二十
98	C ③			0.6 ～ 0.7	14.8	8.1	3.2	576	1		判読不可
99	C ③			0.5 ～ 0.6	12.5	8.3	1.6	225	1		判読不可
100	C ③			0.4 ～ 0.5	11.9	9	2.8	407	1		判読不可
101	C ③			－	12.3	17.1	1	1000	2	B1	陀羅尼品第二十六・妙荘厳王本事品第二十七
102	C ④	2.77	3.13	1.1	15.5	8.8	1.9	472	1	B1	判読不可
103	C ④	2.69	3.11	1.08	4.3	2.5	1.5	22	1		『𑖨』ウーン
104	C ④	2.88	3.06	1.04	14.2	9.7	3.4	546	2		序品第一　提婆達多品第十二
105	C ④			0.9 ～ 1	4.8	3.3	2.4	51	2		面１『𑖨』ウーン　面２　不明
106	C ④			0.9 ～ 1	5.4	4.1	1.2	36	1		『𑖤𑖨』バン・ウーン
107	C ④			0.8 ～ 0.9	3.8	2.8	1.8	28	1		判読不可
108	C ④	2.52	3.28	0.73	11.1	7.8	1.8	203	2		妙音菩薩品第二十四
109	C ④	2.88	3.26	0.69	17.6	12.6	2.1	703	1		判読不可
110	C ④			0.6 ～ 0.7	3.8	3	2.2	33	3		面１『𑖤』バン　面２『𑖨』ウーン　面３『𑖩』アク
111	C ④			埋土下層	18.5	6.9	4	667	1		見宝塔品第十一
112	C ④			埋土下層	18.8	10.4	1.9	529	1		判読不可
113	C ④			埋土	5	3.8	1.6	27	2	A1	面１『𑖤』バン　面２『𑖨』ウーン
114	D ①			床直上	3.2	2.3	0.8	7	1		『𑖤』バン
115	D ①			床直上	12.1	6.9	2.6	328	1		判読不可
116	D ①	1.72	2.26	1.05	0.7	4.1	0.9	31	1		判読不可
117	D ①			1.05 ～ 1.1	14.4	9.7	1.3	391	1		判読不可
118	D ①	1.67	2.73	1.04	21.6	9.2	2	166	1		判読不可
119	D ①	1.24	2.65	1.01	13.6	11	3.8	900	1		判読不可
120	D ①			1 ～底面	15.8	13.8	2.5	745	1		判読不可
121	D ①			1 ～ 1.1	13.9	10.7	1.8	503	1		判読不可
122	D ①			1 ～ 1.05	3.6	2	1.6	15	1		『𑖤』バン
123	D ①	1.89	2.93	0.97	5.8	4.3	1.6	69	2		面１『𑖤』バン　面２『𑖨』ウーン
124	D ①	1.18	2.12	0.95	12	9.4	1.3	224	2	A1	金剛経

第２表　経石計測一覧２

No.	平面位置	基準点からの座標 X（m）	基準点からの座標 Y（m）	深さ（m）	法量（cm） 長軸	法量（cm） 短軸	法量（cm） 厚さ	重量（g）	書写面	打欠の種類	経文または梵字の種類
125	D ①	1.57	3	0.94	15.2	12.3	2	609	1		信解品第四
126	D ①	1.83	2.2	0.93	6.7	2.5	2.2	53	3		面１【𑖌𑖼】バン・ウーン 面２【𑖀】アク 面３【𑖀𑖼】ア・ウン 面４【𑖀】アク
127	D ①	1.88	2.09	0.93	2.1	2.5	1.7	15	1		【𑖌】バン
128	D ①	1.87	2.58	0.92	4.9	3.6	1.6	48	1		金剛界五仏
129	D ①	1.58	2.62	0.92	17.6	10.8	2.9	740	1		判読不可
130	D ①	1.58	2.62	0.91	11.5	8.7	1.8	296	4		序品第一
131	D ①	1.88	2.13	0.9	6	4.2	1.4	53	2		金剛界五仏
132	D ①			0.9～1	5.2	1.9	1	22	2		面１【𑖌】バン 面２【𑖼】ウーン
133	D ①			0.9～1	13.3	10.3	2.1	451	1		判読不可
134	D ①	1.5	3	0.82	12.6	10.7	2.3	405	2		判読不可
135	D ①	1.32	2.62	0.82	15.1	11.6	2.7	551	2	B1	囑累品第二十二～薬王菩薩本事品第二十三
136	D ①	1.52	2.93	0.8	13.8	11.8	3.7	561	2		判読不可
137	D ①			0.8～1	7.1	3.9	3	97	1		判読不可
138	D ①			0.8～1	5.5	3.5	1.8	41	2		面１【𑖌𑖼】バン・ウーン 面２【𑖀】アク
139	D ①			0.8～1	13.7	8.3	1.3	301	2		判読不可
140	D ①			0.8～1	12.5	8.1	1.5	182	2		判読不可
141	D ①			0.8～1	12.4	8	2	268	1		判読不可
142	D ①	1.5	2.38	0.78	22	17	3.8	1610	1		序品第一
143	D ①	1.6	2.1	0.72	19.6	13.6	8	2600	1	B1	判読不可
144	D ①	1.63	2.83	0.68	22.2	12.7	3.6	1540	1		化城喩品第七
145	D ①			0.6～0.8	24.2	14.5	7.3	3400	1		判読不可
146	D ①			0.6～0.8	12.7	10.5	2.5	350	1		判読不可
147	D ①			0.6～0.8	14.7	7.3	1.4	238	1		判読不可
148	D ①			0.4～0.6	11.7	10.7	2	474	2		方便品第二
149	D ①			0.4～0.6	16.9	14.4	3	1760	1		判読不可
150	D ①			0.4～0.6	13.2	8.6	1.5	207	1		判読不可
151	D ①			0.4～0.6	14.2	10.2	2.1	587	1		判読不可
152	D ①			0.4～0.6	4.5	8.7	1.4	78	1		判読不可
153	D ①			0.4～0.6	18.2	9.5	2.1	537	2	A1a1	提婆達多品第十二
154	D ②	1.84	3.11	1.03	4.9	3.5	1.6	31	1		【𑖼】ウーン
155	D ②	1.84	3.12	0.98	6.4	3.4	1.2	28	1		面１【𑖌】バン 面２【𑖼】ウーンか？
156	D ②	1.91	3.07	0.91	14.4	6.7	2.5	313	2		化城喩品第七
157	D ②	1.77	3.09	0.9	13	8.2	1.2	205	2	A1	勤持品第十三～安楽行品第十四
158	D ②			0.8～1	11.4	3	1.9	124	1		判読不可
159	D ②			埋土下層	6.9	4.3	0.8	28	1		普賢菩薩勧発品第二十八
160	D ③	0.77	2.18	0.99	6	4.9	1.7	81	1		金剛界五仏
161	D ③	0.76	2.25	0.97	6.6	4.1	1.3	55	2		金剛界五仏
162	D ③	0.81	2.47	0.85	13.1	11.2	1.7	422	1		化城喩品第七
163	D ③	0.68	2.1	0.8	14.8	14.4	2.7	269	1		判読不可
164	D ③			0.8～1	11.8	5	1.7	132	2		判読不可
165	D ③			0.8～1	12.5	10.7	2.1	442	1		判読不可
166	D ③			埋土下層	6.1	4.5	0.5	14	1		判読不可
167	D ③			埋土下層	6.1	3.7	1.6	53	1		【𑖼】ウーン？
168	D ③			埋土下層	6.6	5.8	1.4	75	1		金剛界五仏？
169	D ③			埋土上層	12.9	11	1.5	313	1		判読不可
170	D ③			埋土上層	17.2	10	3.8	954	1		陀羅尼品第二十六
171	D ③			埋土上層	4.6	4.2	1.6	41	2		金剛界五仏
172	D ③			盛土上層	8.6	8.9	1.3	201	1		判読不可
173	D ③			埋土	17.6	11.8	2.5	826	1		判読不可
174				埋土	12.8	9.2	1.6	241	1		判読不可
175				埋土	11.7	7.8	2	211	1	A1	判読不可
176				埋土	15.7	8.5	5.3	999	1		判読不可
177				埋土	12	12	2	381	1		判読不可
178				埋土	15.8	10.5	3.7	725	1		判読不可
179				埋土	13.6	11.6	1.8	449	1		判読不可
180	A ③			1.3～1.5	4.7	3.5	1.5	36	1		判読不可
181				1ａ層	6	6	1.6	80	2	A1B1a1	分別功徳品第十七
182				表採	4.8	4.3	2	57	2		面１【𑖌𑖼】バン・ウーン 面２【𑖀】キリーク
183				—	11.2	7	2.2	301	2		判読不可
184				—	8.4	8.2	1.6	191	1		判読不可
185				—	18.1	10.9	2	747	1		判読不可
186				—	6.3	3.7	0.9	40	1		判読不可
187				—	5.3	2.9	1.1	24	1		判読不可

第２表　経石計測一覧３

剥離痕のある経石（第57・58図）　出土した経石のなかで、1,007点の経石に人為的に打ち欠いたと考えられる剥離痕が認められた。これらの剥離は無造作に打ち欠いているわけではなく、大きく4つのパターンに分類できる。

A：片面の長軸方向の端部を剥離する（両面の場合は表面がA、裏面がa）

B：片面の短軸方向の側面を剥離する（両面の場合は表面がB、裏面がb）

AB：片面の長短両軸方向を剥離する

C：片面の中央を剥離する

例えば、長軸の両面にそれぞれ1つずつ剥離痕が認められる場合は「A1a1」となる。第57・58図には、これらの代表的なパターンで剥離された経石を掲載した。

1は長軸片面に1つ剥離痕がある（A1）。2は長軸片面に2つ剥離痕がある（A2）。3・4は長軸両面に1つずつ剥離痕がある（A1a1）。5は長軸片面に2つ、短軸に1つ剥離痕がある（A2B1）。6は長軸片面に1つ、中央に1つ剥離痕がある（A1C1）。7は長軸片面と短軸裏面に1つずつ剥離痕がある（A1b1）。8は短軸片面に1つ剥離痕がある（B1）。9は短軸片面に2つ剥離痕がある（B2）。10は短軸両面に剥離痕がある（B1b1）。11は短軸片面に3つと中央に1つ剥離痕がある（B3C1）。12は長軸両面と短軸片面に1つずつ剥離痕gある（A1a1B1）。13は長軸片面1つ短軸両面に剥離痕がある（A1B2b3）。14は長軸両面と短軸片面に剥離痕がある（A1a1b3）。15は長軸片面と短軸両面に剥離痕がある（A1B1b3）。16は長軸両面、短軸両面に1つずつ剥離痕がある（A1a1B1b1）。

剥離部位の比率　1,007点の剥離痕のある経石の打ち欠き部位による内訳は次の通りである（両面含む）。

A：430点（42.7%）

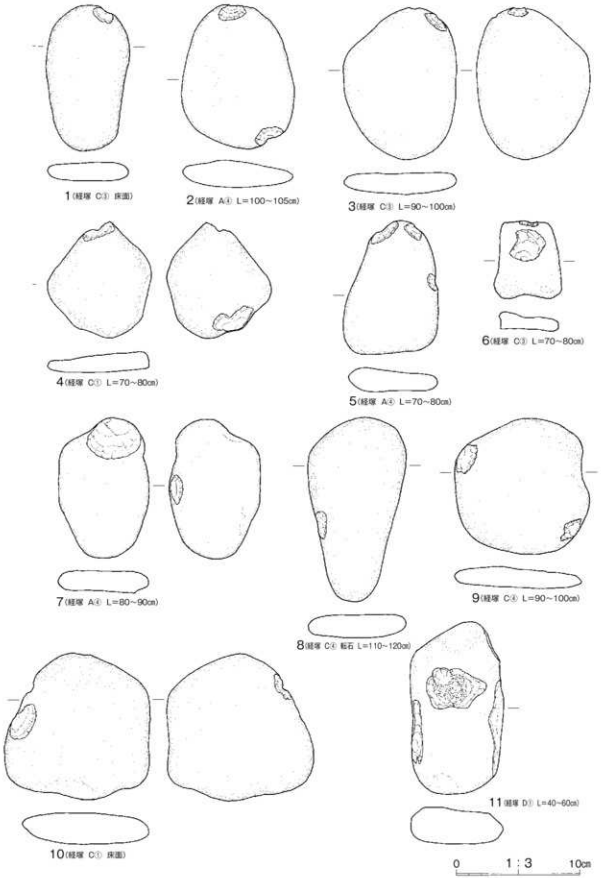
B：381点（37.8%）

AB：188点（18.7%）

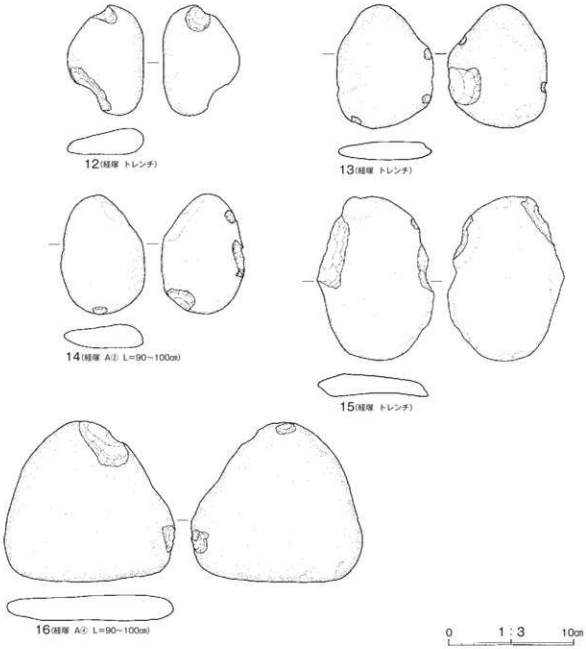
C：8点（0.8%）

若干の偏りはあるが、長軸と短軸それぞれを打ち欠く経石の比率は、ほぼ近い数値である。両軸を打ち欠く経石がその半分ほどの比率となっている。面の中央を打ち欠く経石は極めて少ない。

剥離痕のある経石は、調査時に点取りではなく任意グリッドのみで取り上げたため、XY座標による正確な出土位置は不明である。しかし、これは偶然に剥離したものではなく、埋経の際に何らかの仏教的儀礼に拠って行われた行為の所産と考えられる。



第57図　剥離痕のある経石（1）



第58図　剥離痕のある経石（2）

（3）．近世の土坑墓・溝跡

土　坑　墓　近世の土坑墓は27基確認されている。いずれも人為堆積で暗褐色土を主体に黄褐色土が混入するしまりのない層である。

墓番号	位置	平面形	規模			重複関係	出土遺物
			上端（m）	下端（m）	深さ（m）		
1	G10-H24	不整円形	0.92	0.78	1.08	－	経石、砥石、ガラス板、
2	G10-H24	不整円形	0.8	0.52	0.5	－	経石、寛永通寶
3	G10-I24	不整円形	0.58	0.43	0.86	4号墓を切る	
4	G10-I24	不整円形	1.17	0.8	1.22	6号墓を切る	紅皿、猪口、キセル、ガラス板、寛永通寶
5	G10-I24	不整円形	0.8	0.53	0.77	4、6、7号墓を切る	鉄銭、寛永通寶
6	G10-I24	不整円形	0.94	0.71	1.08	4、5号墓に切られる	経石、キセル、ガラス板、寛永通寶
7	G10-I24	不整円形	0.23	0.18	0.06	4、5号墓に切られる	寛永通寶
8	G10-J23	不整円形	0.73	0.55	1.06	10号墓を切る	経石、鉄銭、キセル、寛永通寶、永楽通寶
9	G10-J23	不整円形	1	0.53	0.98	10号墓を切る	経石、かわらけ、鉄銭、キセル、寛永通寶
10	G10-J23	不整円形	1.25以上	0.92	0.73	8、9号墓に切られる	経石
11	G10-J24	不整円形	0.42	0.28	0.33	－	経石
12	G11-I1	不整楕円形	長軸1.1 短軸0.6	長軸1.0 短軸0.55	0.19	16号墓を切る	
13	G11-I1	不整円形	0.8	0.52	0.53	15号墓を切る	碗、小坏
14	G10-I25	不整楕円形	長軸1.2 短軸0.62	長軸0.9 短軸0.6	0.68	19号墓を切る	
15	G11-I1	不整円形	1.44	1.03	0.91	20、22、23号墓を切る	碗
16	G11-J1	長方形	長軸1.76 短軸1.31	長軸1.18 短軸0.9	0.95	15、20号墓を切る	
17	G10-J25	不整円形	0.84	0.56	1.04	21、23号墓を切る	
18	G10-J25	不整円形	0.8以上	0.53以上	0.58	17号墓を切る	
19	G10-I25	不整円形	0.85	0.56	1.72	15、22号墓を切る	碗
20	G11-I1	不整円形	1.2	0.58	1.53	23号墓を切る	紅皿、キセル
21	G10-J25	長方形	長軸1.37 短軸1.12	長軸1.07 短軸0.88	1.05	22号墓を切る	硯、貝殻、炭化物、寛永通寶
22	G10-J25	長方形	長軸1.39 短軸1.18	長軸1.10 短軸0.96	0.76	23号墓を切る	かわらけ、キセル、寛永通寶
23	G10-J25	不整円形	1.02	0.62	0.76	21号墓を切る	硯、キセル、小壺、猪口、碗、数珠玉、寛永通寶
24	G10-J25	不整円形	1.14	0.54	1.23	26号墓を切る	鏡、キセル
25	G10-K25	不整円形	1	0.63	0.97	27号墓に切られる	キセル
26	G10-K25	不整円形	0.75	0.41	0.37	26号墓を切る	寛永通寶
27	G11-K1	不整楕円形	長軸1.22 短軸0.57	長軸1.00 短軸0.57	0.88	－	

第３表　土坑墓計測一覧

RG004 溝跡（第61図）

位　　置　調査区中央　　**平 面 形**　東西に延び、東端は調査区外へ、西端は削平のため不明。

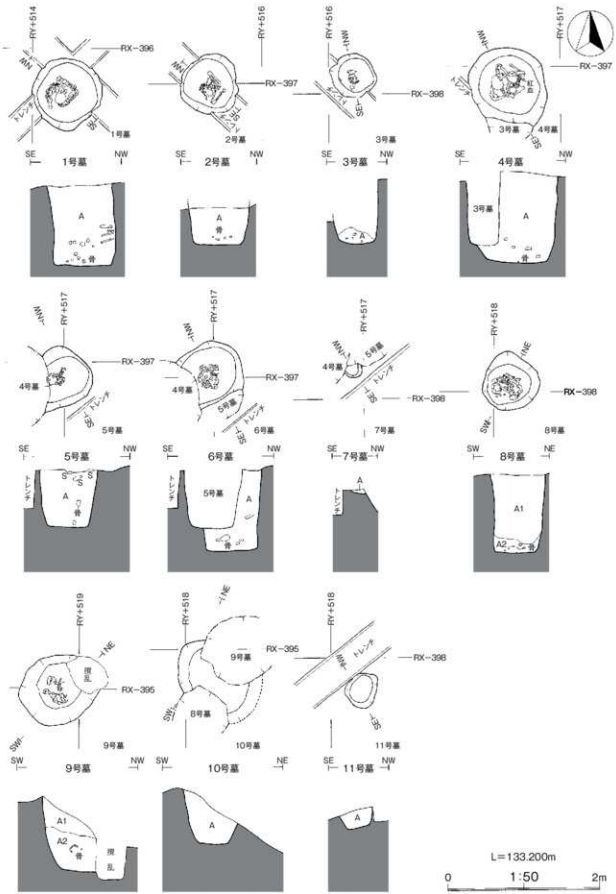
規　　模　長さは5.9 mをはかり、幅は上端1.1 ～ 1.5 m・下端0.7 ～ 0.9 mをはかる。

重複関係　近世墓に切られる。　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　黄褐色シルト上面

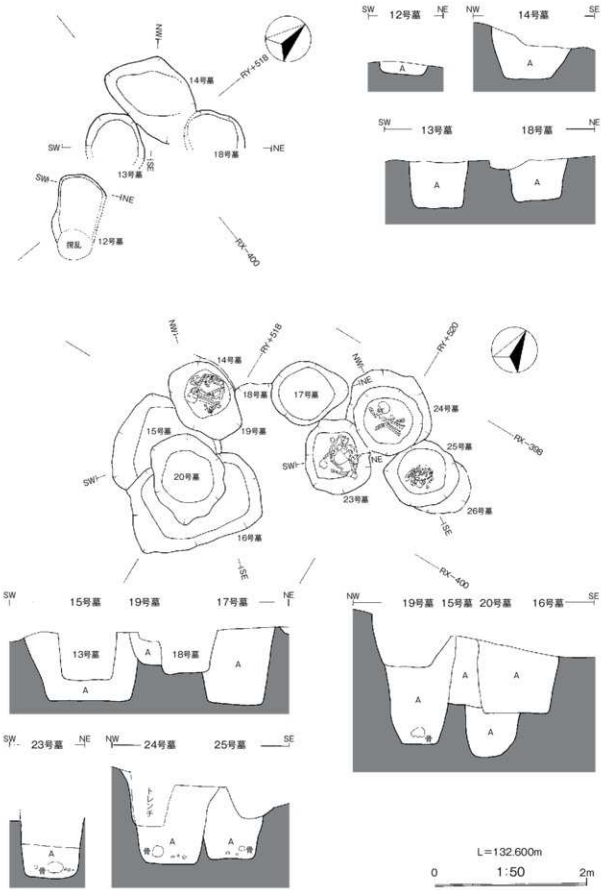
埋　　土　自然堆積による。２層に大別され、Ａ層は黒色土を主体に粒状の褐色土を含む層である。Ｂ層は褐色土を主体とした、壁の崩壊土である。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.30 mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。

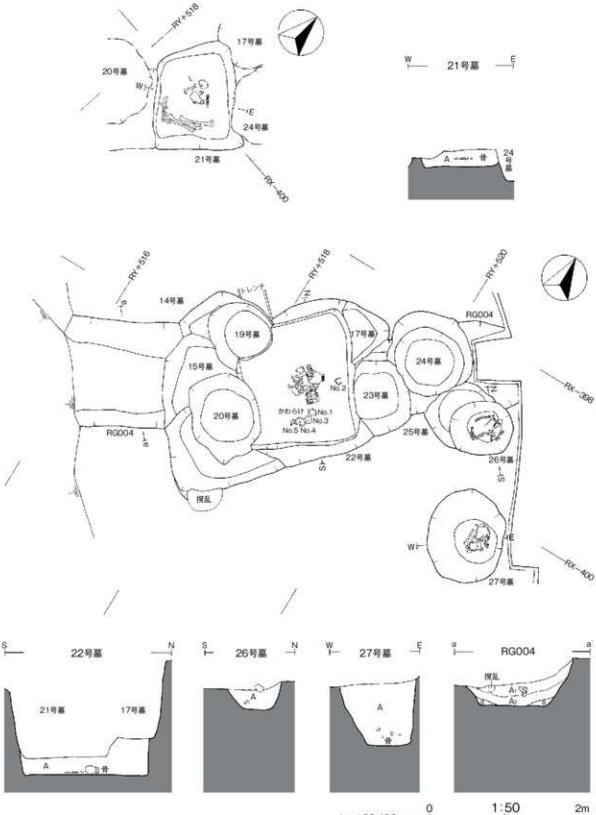
底面の状態　ほぼ平坦　　**出土遺物**　埋土中より弥生土器が出土している（第70図）。


1号墓
2号墓
3号墓
4号墓
5号墓
6号墓
7号墓
8号墓
9号墓
10号墓
11号墓
RX−396
RX−397
RX−398
RX−395
RY+514
RY+516
RY+517
RY+518
RY+519
SE
NW
SW
NE
A
A1
A2
骨
撹乱
トレンチ
L=133.200m
0
1:50
2m

第 59 図　土坑墓（1）


NW
14号墓
RY+518
SW
18号墓
NE
13号墓
SW
NE
撹乱
12号墓
RY−400
SW
12号墓
NE
A
NW
14号墓
SE
A
SW
13号墓
18号墓
NE
A
A
NW
14号墓
RY+518
18号墓
17号墓
NW
NE
RY+520
24号墓
15号墓
19号墓
25号墓
RY−398
SW
20号墓
SW
NE
23号墓
26号墓
16号墓
SE
SE
RY−400
SW
15号墓
19号墓
17号墓
NE
13号墓
A
18号墓
A
A
NW
19号墓
15号墓
20号墓
16号墓
SE
A
A
A
骨
SW
23号墓
NE
NW
24号墓
25号墓
SE
トレンチ
A
骨
A
A
骨
L=132.600m
0
1:50
2m

第60図　土坑墓（2）



第61図　土坑墓（3）、ＲＧ００４溝跡

（4）．土坑墓および包含層出土遺物

土坑墓からは陶磁器、かわらけ、煙管、鏡、簪、硯、砥石、古銭、経石などが出土している。

陶磁器類（第62・63図）　1～17は土坑墓出土の陶磁器類である。1は肥前系の紅皿である。2は猪口である。3は体部に屈曲を持つ相馬系の碗である。4はロクロ成形のかわらけである。5は瀬戸美濃の二重網目文が施された染付小杯である。内面と外面にそれぞれ「洛東瑞竜山」、「なんぜんじたんごや」と文字が後から上絵付けされてある。6は二重網目文が施された肥前磁器碗である。7は梅花文が施された肥前磁器碗の体部片である。8・9は肥前の紅皿である。10～14はロクロ成形のかわらけである。15は京焼風の肥前碗である。16は灰釉小壺である。17は笹文が施された猪口である。

18～25は1a層出土の陶磁器類である。18は肥前染付碗で、梵字文が施される。19は格子目文が施される染付碗である。地元産の花古焼か山陰焼と考えられる。20は肥前染付輪花皿で唐草文が施される。21・22は肥前染付碗で、22は見込五弁花文が施される。23・24は京焼風の湯呑碗と茶碗である。25は鉄釉が施された甕である。

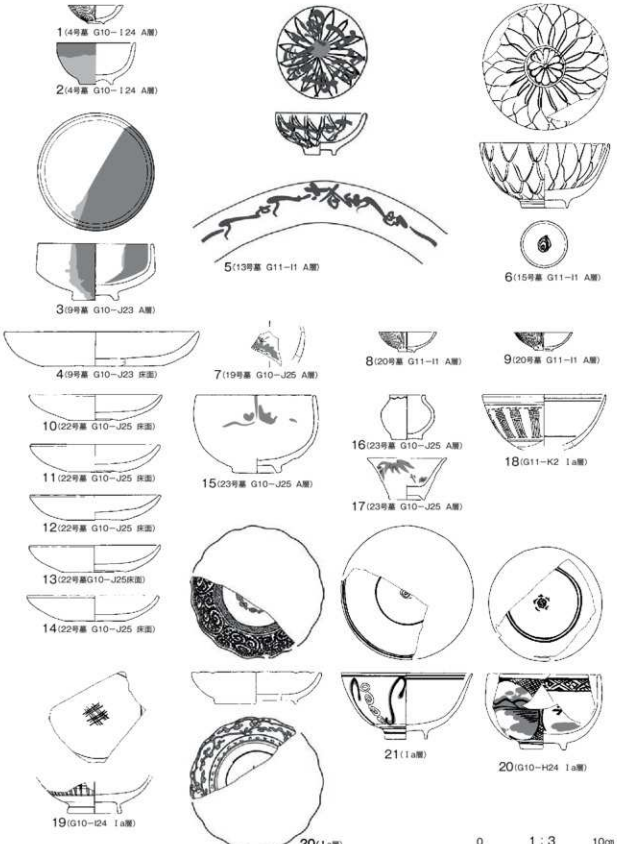
石製品（第63図）　26は硯である。外面に黒色塗料が塗布され、海端部と陸端部に墨が残る。使用による堂部の磨耗は顕著には見られない。重量212.7ｇ。27は砥石である。四面を使用しており、上部に欠損が見られる。28は多孔質安山岩製の磨石である。1/3欠損している。29は多孔質安山岩製の搗臼である。円形の礫の表に碗形で大きい凹みがある。

煙　管（第64図）　1～11はすべて銅製の羅宇煙管である。9以外は全て小口に羅宇が残存している。1は雁首の首部に、魚子地に「石持地抜き三本蕨」、「丸に三つ引き」の家紋が彫金され、魚子地には漆のような塗料が塗布されている。吸口は長く、蔓柏文様が彫金されている。2は雁首の火皿が欠損し、首部に膨らみを持ち肩に細かい条痕が施されている。3は雁首、吸口両方に断面六角形の肩を持ち、火皿の付け根に補強帯、左側縁には火皿窓がある。4は雁首、吸口に段差が滑らかな肩を持ち、輪刻線が施される。5は火皿を欠損する。6は雁首のみで、脂返しから火皿にかけて布が付着している。7は全体に緑青による腐食が激しい。8は羅宇が折れずに残存している完形品である。雁首の肩に篆刻で文様が施されている。9・10は吸口のみで、10は肩に輪刻線が施され段差は滑らかである。11は火皿がやや大振りである。

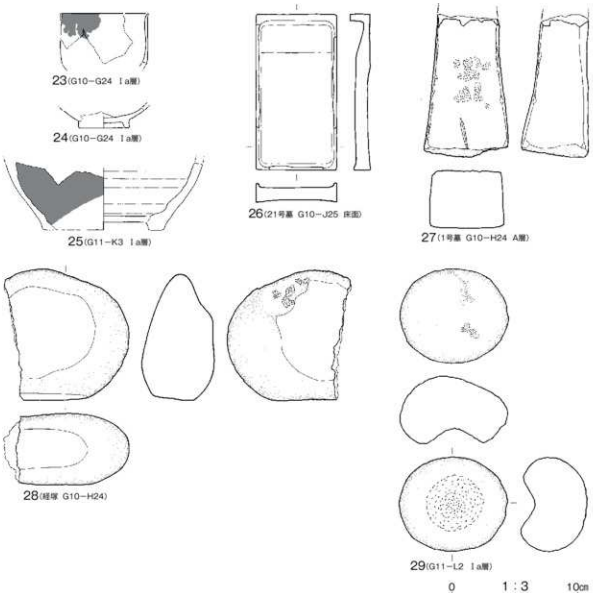
鏡ほか（第65図）　1は銅製の柄鏡である。直径8.3cm、柄長5.8cm、柄幅1.4cmをはかる。裏面には唐草地に桔梗紋が施され、「藤原光永」と銘がある。両面の一部に布が付着している。2は銅製の円形鏡である。直径3.9cmをはかる。3・4はガラス製鏡である。両方とも若干の曲面を呈し、凹み面に反射材の名残と思われる塗料が付着している。

5は銅製の胴長の延板に二つ丸銹が付いた銅製の金具である。6は銅製のビラカンまたはチリカンの一部と考えられる。薄板部分に桜紋が刻印され、二又の銅線から延びる花弁様飾と付け根部分に、青緑色のガラス玉が装着されている。7は水晶製の数珠玉である。縦と横から穿孔され、中央で直交しているが、横軸の穴は貫通していない。

古銭（第66～68図）　出土した古銭のほとんどは寛永通宝である。寛永通宝の銅一文銭は、鋳造年代が文字の形態によって判明しており、1期古寛永、2期新寛永（文銭）、3期新寛永と大きく3つに区分される（『近世の出土銭Ⅱ―分類図版編―』　兵庫埋蔵銭調査会）。



第62図　土坑墓・遺構外出土遺物（1）



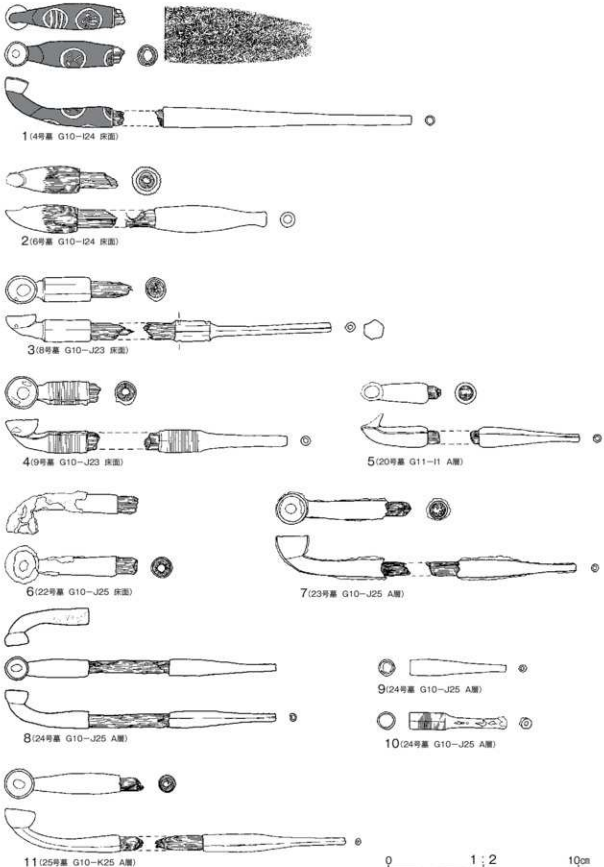
第 63 図　土坑墓・遺構外出土遺物（2）

1・3・12・14・15・19・24・25・35・50・51・52・63・72は1期の古寛永である。

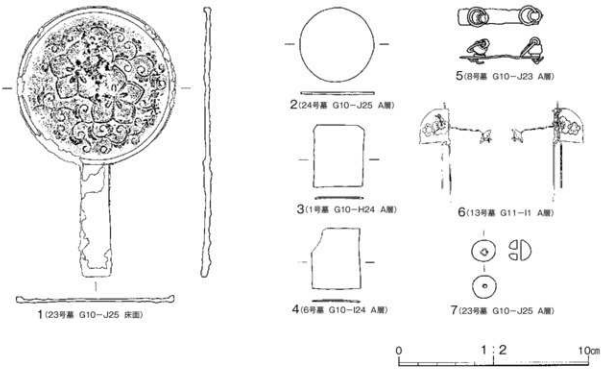
7・21・22・29・31・32・60・62・67・73・75・77は「文銭」と呼ばれ、背面上部に「文」の字を鋳出している2期の新寛永である。上記以外の寛永通宝はすべて3期の新寛永に属する。43・44は背面同士で癒着しており、分離させることが困難であったため、表面のみ掲載した。78・79は3期新寛永であるが背面上部にそれぞれ「小」、「足」の字が鋳出されている。

8号墓出土の20は永樂通宝である。71は経塚盛土層から出土した皇宗通宝であるが、かなり摩滅している。

一字一石経（第69図）　土坑墓および表土（Ⅰa層）からは3,374点の一字一石経が出土している。その内訳は1号墓354点、2号簿58点、4号墓107点、5号墓20点、6号墓314点、8号墓319点、9号墓1,907点、10号墓288点、11号墓2点、Ⅰa層4点である。そのうち判読および墨痕の認められる経石は22点のみであった。



第64図　土坑墓出土煙管



第65図　土坑墓出土遺物

経石の文字　1は墨痕のみで判読不能。2は「於」、「於」の異体字。3は「入」。4は「何」もしくは「向」か。5は「時」か。6は「過」、「過」の異体字。7・8は墨痕のみで判読不可。9は「余」、「爾」の異体字。10は「過」、「過」の異体字。11は「入」あるいは「人」か。12は「便」。13は「隣」の異体字である「鄰」か。14は「令」の下部か。15は「服」。16は「中」か。17は「才」か。18は「誦」か。19は「微」か。20は「億」。21は「名」もしくは「谷」か。22は「辞」。

続縄文土器（第70図1～18）　1～18は続縄文（後北C2-D式）と考えられる土器である。1は微隆起線で区画された帯縄文と、刺突列によって施文された波状口縁を呈する深鉢である。口唇部に刻目が施された微隆起線を巡らし、波頂部より二条の微隆起線を垂下させ体部で微隆起線によって区画された弧状の帯縄文と連結する。体部下半はその弧状帯縄文から垂下する微隆起線に挟まれた、帯縄文と三角形刺突列が交互に施される。2～5は縦横に微隆起線および帯縄文を施す深鉢体部片である。6～16は帯縄文を施す深鉢体部片である。17・18は帯縄文を施す底部片である。

弥生土器（第70図19～24）　19・20は付加条縄文と交互刺突を施す甕の口縁部である。21～23は付加条縄文を施す甕体部である。24は無文部である。

1 (2号墓 G10−H24 床面)

2 (2号墓 G10−H24 床面)

3 (2号墓 G10−H24 床面)

4 (2号墓 G10−H24 床面)

5 (2号墓 G10−H24 床面)

6 (2号墓 G10−H24 床面)

7 (4号墓 G10−I24 床面)

8 (4号墓 G10−I24 床面)

9 (4号墓 G10−I24 床面)

10 (5号墓 G10−I24 床面)

11 (6号墓 G10−I24 床面)

12 (6号墓 G10−I24 床面)

13 (6号墓 G10−I24 床面)

14 (7号墓 G10−I24 床面)

15 (7号墓 G10−I24 床面)

16 (7号墓 G10−I24 床面)

17 (7号墓 G10−I24 床面)

18 (2号墓 G10−I24 床面)

19 (7号墓 G10−I24 床面)

20 (8号墓 G10−J23 A層)

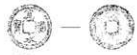
21 (9号墓 G10−J23 床面)

22 (9号墓 G10−J23 床面)

23 (9号墓 G10−J23 床面)

24 (9号墓 G10−J23 床面)

25 (21号墓 G10−J25 床面)


26 (21号墓 G10−J25 床面)

27 (21号墓 G10−J25 床面)

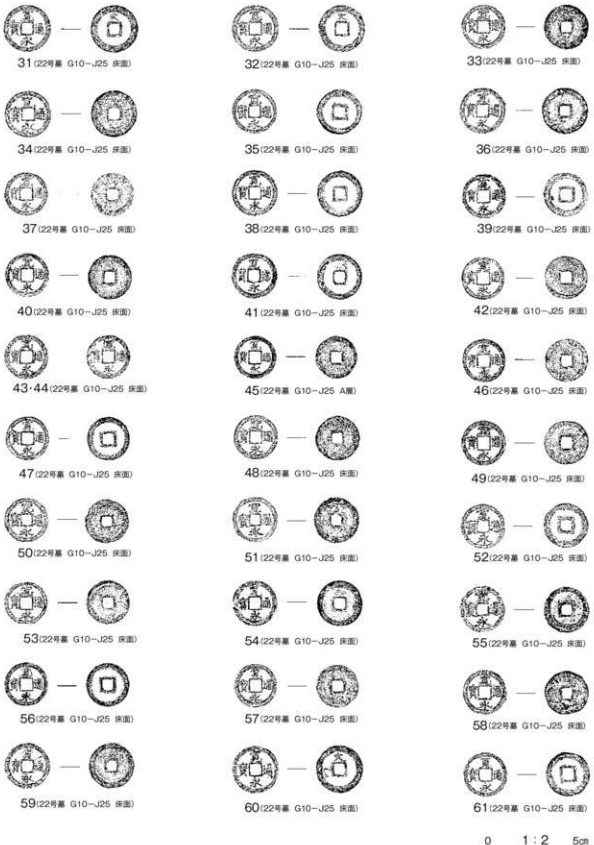
28 (21号墓 G10−J25 床面)

29 (21号墓 G10−J25 床面)

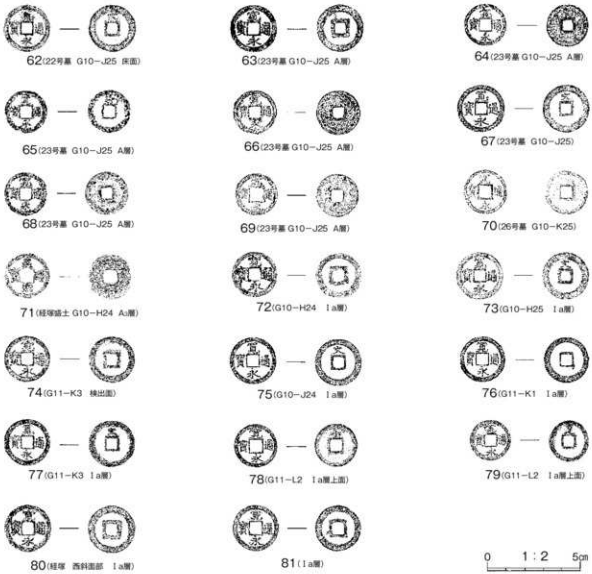
30 (21号墓 G10−J25 床面)

0 1:2 5cm

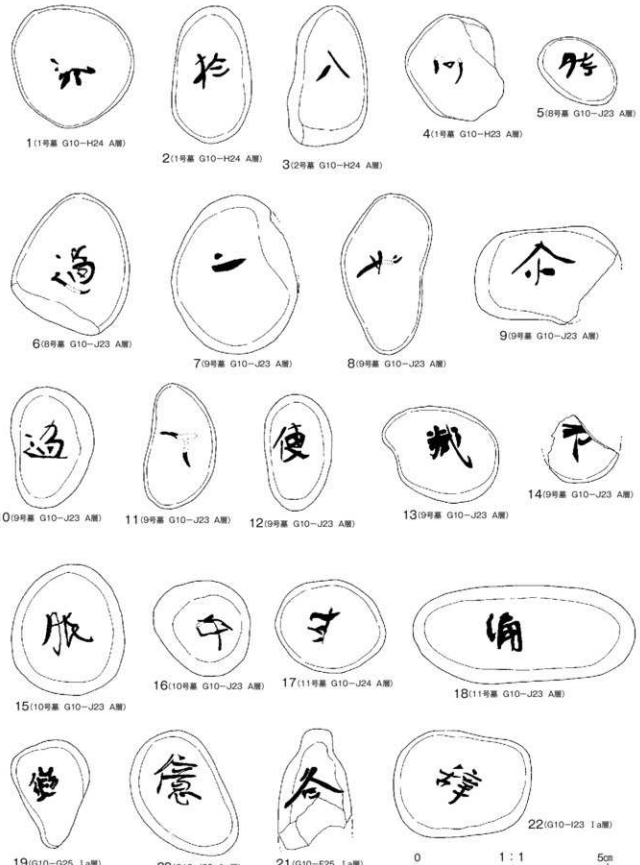
第66図　土坑墓出土古銭（1）



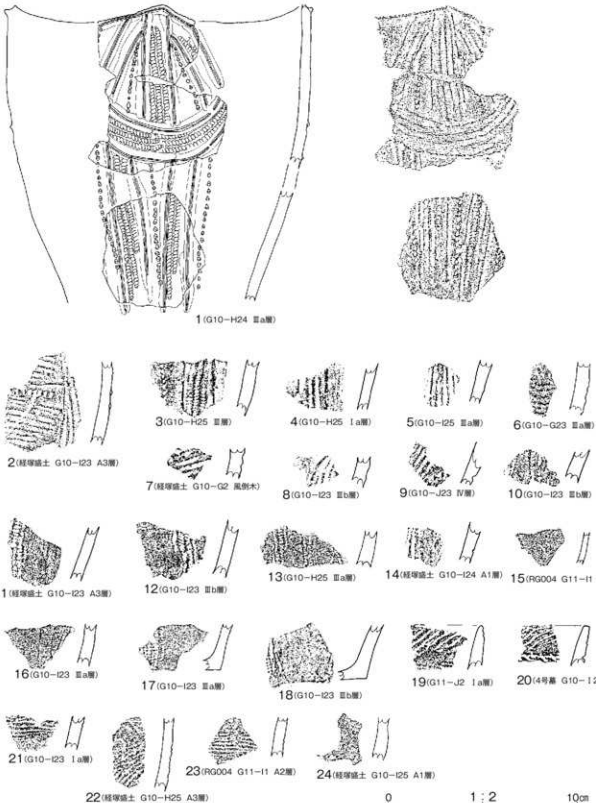
第67図　土坑墓出土古銭（2）



第 68 図　土坑墓・経塚盛土・遺構外出土古銭



第69図　土坑墓・遺構外出土経石



第70図　包含層出土遺物

Ⅲ．総　括

平成18・19年の2ヵ年にわたる調査の結果、岩手県内でも事例のない多字一石経を埋納した中世の経塚1基、近世の土坑墓27基等を確認した。以下、経塚、礫石経、近世墓について考察を行い総括とする。

（1）．経　塚

経塚の形態　宿田南経塚は、墳丘（盛土層）構築後に土坑を穿ち、経石を埋納する形態であり、松原典明氏の分類するところのⅡB類となる（松原1994）。しかし、墳丘は大部分が削られて原形が方形なのか円形なのかは不明である。また、墳丘南東の溝跡が、経塚に伴う周溝であるならば中世墳墓に共通する形態であり、時期決定の補完要因となり得るが、調査段階で墳丘に伴うものであるかは判別し難かった。

主体部となる土坑の規模は一辺約3.4 m・深さ約1.0 mをはかり、他の事例を見ると一辺1 m前後のものが多く、本経塚はかなり大型の部類になる。しかし、これらの経塚の大半は一字一石経を伴うもので、多字石経が容積の多数を占める本経塚とは単純に比較することはできず、多字と一字で分けて考える必要がある。

土坑中央の段差の埋土は底面直上の埋土と同様、地山黄褐色土を含むしまりのある暗褐色土が堆積している。土坑底面にピットあるいは周溝が掘り込まれている事例はあるが、段差もしくは溝状のものが掘り込まれた例は類例がなく、用途は不明である。

埋経の手順　埋経の手順は、床面に経典が書写された経石を敷き詰め、その直上、土坑中央部に梵字を書写した経石を含む小礫をマウンド状に積み上げる。そして、そのマウンドを覆うように、再度、経典が書写された経石を詰め込んでいる。経石を詰め込む際には、東側から順に並べている。また、経石の中には、規則的な剥離痕が残されたものが多数含まれている。経典が書写された経石にも、この剥離痕が認められるものがあり、書写した経文を壊して剥離していることから、予め打ち欠いた礫に書写したのではなく、書写してから打ち欠いたと考えられる。

他の経塚の調査事例で、経石の並べ方や詰め込み方を言及した報告が少ないため、本経塚の事例が一般的なものなのか、特殊なものかは判断できないが、経塚造営については一定のきまりが存在するようであり、これらの手順もなんらかの仏教的儀礼に則り行われた結果と考えるべきであろう。

（2）礫　石　経

書写内容　本経塚で墨痕あるいは文字が確認された礫は186点である。その書写内容の内訳は、妙法蓮華経が29点、金剛経が3点、梵字が77点、不明が77点である。経文が書写されたものは、全て多字一石経である。梵字は、一字の礫もあるが、大半は複数の梵字が書写されている。

妙法蓮華経　妙法蓮華経八巻二十八品のうち、序品第一、方便品第二、譬喩品第三、信解品第四、化城喩

品第七、見寶塔品第十一、提婆達多品第十二、勤持品第十三、安楽行品第十四、従地涌出品第十五、分別功徳品第十七、随喜功徳品第十八、不軽菩薩品第二十、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四、陀羅尼品第二十六、妙荘厳王本事品第二十七、普賢菩薩勧発品第二十八の二十品が確認できる。

所々、抜けている部分はあるものの、当初は二十八品すべてが書写されたものと考えられる。

金剛経　金剛経は、三十二分の区分が記されている。鳩摩羅什訳と考えられる。

梵字　梵字は、𑖀（バン：大日如来）、𑖪（ウーン：阿閦如来）、𑖮（タラーク：宝生如来）、𑖨（キリーク：阿弥陀如来）、𑖩（アク：不空成就如来）の種子と、これら五仏を組み合わせた金剛界五仏がある。金剛界五仏は西を上とし、中心に𑖀、西に𑖨、北に𑖩、東に𑖪、南に𑖮を配置し、梵字で描く曼荼羅、所謂「種子曼荼羅」を書写している。

書写方法　妙法蓮華経を書写した経石は、ほとんどが扁平な礫であるが、一部に丸みを帯びたものや厚みのあるものも存在する（No.144・156・111・170・77 など）。書写方法の基本は、礫の最も平らな面を選び、縦書きで礫の右から左方向へ記していき、表から裏へと連続している。表裏ともに鮮明に経文が残っているものは少なく、大半は片面のみに残存している。これは、経石の出土状況が、墨書の薄い、または残っていない面が上向きであったことから、経塚に染み込んだ雨水の影響と考えられる。

また、品と品の間は、礫を取り替えることなく連続して記している。例えば、No.157 は面 1 の真ん中付近で勤持品が終わり、続けて安楽行品の品題を記して冒頭から書写を続けている。No.135 も同様で、嘱累品から薬王菩薩本事品へと続けて記している。No.101 は、面 2 の冒頭部分で陀羅尼品から荘厳王本事品へと続けている。いずれの場合も、品題と本文の間は行を変えることなく続けて書写しているが、品と品の間は改行をして書写を行っている。

表裏の平らな面だけではなく、側面等も利用して書写する特殊な例もある。特殊な書写方法の経石は、No.130・104・157 の例が挙げられる。

No.130 は、面 1（表右側面）→面 2（表面）→面 3（表左側面）→ 90 度回転させて面 4（裏左側面）→面 5（裏面）と記している。

No.104、は序品第一が書写されているが、途中から提婆達多品第十二に変わっている。面 1（表右側面）序品第一→面 2（表面）提婆達多品第十二→面 3（表左側面）→ 90 度回転させて面 4（裏下面）→面 5（裏面）と記している。

No.157 は、面 1 に書写後、180 度上下を回転させて面 2 に記している。

金剛経の書写方法も妙法蓮華経と基本的に同じであるが、No.6 は面 1 から面 2 へ 90 度回転させて記している。

梵字が書写された経石は円形で扁平な礫が多く、中には丸みをもったものも多数見られる。ほとんどの礫は片面、あるいは両面に書写されているが、中には No.40・110・126 のように 3 面に書写しているものもある。金剛界五仏が書写された経石は、形や大きさ、厚みにいたるまで近似した礫を使用している。

筆跡　本経塚で出土した経石には、複数の異なる筆跡が観察でき、これらは大きくＡ～Ｅの５タイプに分けることができる。Ａ：細い線で一画一画の間が離れて、略されている部分が多く、筆勢が速い印象を受けるもの。Ｂ：細く小さいが一つ一つ丁寧に書いている印象を受けるもの。

C：行書のように字体が崩れており、字間も狭く、一字を見出すのが困難なもの。D：Aと印象が似ているが、一画一画の線が太いもの。E：いずれの筆跡よりも太く大きく、一画一画略さずに書写しているもの。A～Dの筆跡に共通していることは、字が全て右下がりで達記調な点である。

数量的にはAが最も多く、No.13・43・104・101・130・135などが挙げられる。Bは、No.10・126である。Cは、No.31・60・144などであり、判読できなかった経石はこのタイプが多かった。Dは、No.55・95・153・157などが挙げられる。Eは、No. 6・34・124と金剛経のみに見られる筆跡である。

AとDが同じ人物の筆跡である可能性を考慮すると、妙法蓮華経が3～4人、金剛経で1人の筆者がいたと推定される。

梵字にも、異なる筆跡が複数存在する。種子のみの経石には、線が太く空点や荘厳点の入りが雑で書き慣れていない印象を受けるものと、流暢に流れるように書き慣れているものが混在している。金剛界五仏の経石は、すべて細字で流れるように達筆で書き慣れている筆跡である。また、金剛界五仏のバンとウーンはすべて空点と荘厳点が省略されている。筆跡の違いから、種子は4～5人、金剛界五仏は1人の筆者がいたと推定される。しかし、経典と梵字それぞれの筆者が同一人物であるかは、現段階では分析が至らず不明である。

書写経典の数　経石文の中には、別々の経石で同じ経文が重複している部分がある。例を挙げると、序品第一が記された No.10 面1と No.130 面2、No.104 面1と No.142 面1が、それぞれ同じ箇所を重複して書写している。また、化城喩品第七の No.55 と No.74、陀羅尼品第二十六の No.101 と No.170 もそれぞれ重複している箇所がある。No.104 と 142 は筆跡が類似しているが、No.10 と No.130 は明らかに筆跡が異なり、筆者はそれぞれ別な人物であると考えられる。

これらのことから、複数の人物が妙法蓮華経八巻二十八品を、それぞれ二部以上書写していたと考えられる。4人の筆者が存在していたとするならば、8部以上の妙法蓮華経が埋経されていたことになる。

（3）近　世　墓

土坑墓からは、陶磁器、寛永通宝、煙管など多数の副葬品が出土しており、それらの時期を基に埋葬時期を考えてみる。

陶磁器類　陶磁器類は、瀬戸美濃、肥前、相馬など多岐にわたるが、突出して古いものはなく、概ね18～19世紀の範疇に入るものである。器種も紅皿、猪口、小坏、小壺、碗など日常雑器が主体となっており、被葬者が生前に愛用していたものを一緒に埋葬したと考えられる。

その中でも、特筆すべきものは、13号墓から出土した文字が絵付けされた、19世紀初頭の瀬戸美濃の小杯である（第62図5）。内面の文字は「洛東瑞竜山」と記されており、「洛東」は京の都の東側を指し、「瑞竜山」とは、その洛東に建つ臨済宗南禅寺派大本山の「南禅寺」の山号である。では、外面の「なんぜんじたんごや」は何を意味するのか。元治元年（1864）に刊行された、当時の京の都の名所を紹介する『花洛名勝図会』を見ると、南禅寺の総門前に「丹後屋」という名の湯豆腐店が描かれている。また、寛政11年（1799）に刊行された『都林泉

名勝図会」にも「名物　南禅寺前　湯豆腐店」とあり、店の軒先に「丹後屋」の暖簾が掛かった風景が紹介されている。すなわち、「なんぜんじたんごや」とは、この南禅寺前の湯豆腐店「丹後屋」を指していると推測される。13 号墓の被葬者は、生前、京の都に寺社参りした際に「丹後屋」に立ち寄ったか、あるいはどこかで店の宣伝として配られていたこの小杯を手に入れたものと考えられる。ちなみにこの「丹後屋」は、「奥丹」という名で現在も、南禅寺前で営業している。

寛永通宝　寛永通宝が出土している墓は、一部に古寛永を含むものもあるが、全てに新寛永が伴っている。また、寛永通宝が出土していない墓もあるが、新旧関係から全て新寛永を副葬した墓よりも新しく掘り込まれたものである。新寛永の初鋳年は元禄 10 年（1697）である。

煙　管　煙管は、古泉弘氏が雁首と吸口の形態により、Ⅰ～Ⅵ期に分類しており（古泉 2001）、今回の調査で出土した煙管は、雁首の脂返しの湾曲が小さくなるⅤ期に相当し、18 世紀末～ 19 世紀以降のものと考えられる。

鏡　鏡は、銅製の所謂「和鏡」とガラス製の二種類が出土している。23 号墓出土の柄鏡は、背面に桔梗文と「藤原光永」の鏡師銘があり、県内でも岩脇遺跡や河崎の欄疑定地でも同様の鏡が出土している（岩埋文 235・474 集）。「鏡師名寄」によると、「藤原光永」は江戸時代中期～後期に使用された鏡師の雅号とある（中野 1969）。

ガラス製鏡は国産の粗製品と考えられる。国内のガラス製鏡の生産は 18 世紀末に始まり、19 世紀半ばには庶民に重宝されていたとされる。市内の発掘調査でガラス製鏡が確認されたのは、今回が初めてで、当時の庶民の生活を知る上で貴重な資料である。

一字一石経　土坑墓および表土から出土した墨痕が認められる経石は 22 点を数え、判別できるものは、すべて漢字が書写されていた。多字一石経と同様に、判読できた文字を「大正新脩大蔵經テキストデータベース」で検索したところ、妙法蓮華経の中に含まれている文字であることが分かった。しかし、土坑墓から出土した経石の総点数は 3,400 点あまりで、土坑墓単体では 1,000 点も出土していないのがほとんどである。おそらく、妙法蓮華経八巻二十八品のうちの一部分を書写したものである可能性が高い。

埋経の意味　近世の経塚造営の目的は専ら、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穣・村内安全などの現世利益的な性格が強くなる。盛岡市内では永祥院経塚（盛岡市教委 1985）が調査されているが、法名を記した多字石が多いことから追善供養の目的で造営されたと考えられる。今回、宿田南遺跡で出土した一字一石経は、経典・願文等は明らかでないが、土坑墓にともなうものであることから、被葬者への追善供養として行われた埋経であったと考えられる。

土坑墓の年代　出土した遺物、特に煙管やガラス鏡などから土坑墓の年代を考えると、18 世紀末～ 19 世紀半ばと、江戸時代でもかなり後半の時期と推定される。

（4）遺物包含層

続縄文土器　経塚盛土直下で確認された黒色土層からは、続縄文土器の破片が出土している。出土した土器は、口唇部に刻目を加えた微隆起線を巡らし、体部上半は微隆起線に挟まれた帯縄文が縦位あるいは弧状に組み合い、三角形刺突列が施文されるものである。市内では安倍館遺跡や永福寺山

遺跡で同様の土器が出土しており、後北C 2- D式期中段階に位置づけている（盛岡市教委 1997・1999）。また、本遺跡の北方に位置する宿田遺跡では、北大Ⅰ式期の続縄文土器や古式土師器、黒曜石製拇指状掻器が出土している（盛岡市教委 2002）。

（5）ま と め

今回の調査で発見された宿田南経塚は、多くの多字一石経と梵字が書写された経石が納められた礫石経塚である。また、岩手県内外において数少ない本格的な礫石経塚の発掘調査であり、多くの貴重な資料を得ることができた。

しかし、残念ながら経塚の半分以上が後世の削平を受けていたことも関係し、経塚造営の願文・願主、あるいは記年銘が記された経碑や礫は出土しなかった。また、造営時期を推定できる陶磁器等の遺物も出土していないため、年代決定は困難と言わざるを得ない。唯一の出土遺物は「皇宗通宝」であるが、流通年代の幅が広く、やはり時期決定の決め手とはなり得ない。ただし、初鋳年が 1038 年であることから 11 世紀より以前には遡らないことは確かである。

そこで、経典と梵字の種類・書風など、状況証拠的なもので造営の目的や年代を推測し、本報告のまとめとしたい。

経塚に納められる書写経典として、各時代を通して主体的な位置を占めるものは、妙法蓮華経であることは、先学の事例から周知のことである。しかし、妙法蓮華経は特定宗派に限定されず幅広く用いられる経典であり、逆に言えば、妙法蓮華経だけでは目的や時代を特定するのは難しいと言える。本経塚からは妙法蓮華経以外に、数多くの梵字が書写されたものと、数は少ないが金剛経が書写されたものが出土している。

妙法蓮華経に共通する書風は、右肩下がりで、編・旁といった部首が大部分、略されて書写されている点である。国際仏教学大学院大学教授の落合 俊典氏からのご教示によると、通常、写経を行う場合は手本を見ながら一字一句、略することなく書写されるという。また、この妙法蓮華経の書風は、鎌倉時代中期～後期の書風に相当するとの、ご教示を頂いている。

梵字を用いる宗派としては真言宗と、密教も教義に取り入れている天台宗が挙げられる。しかしながら、妙法蓮華経との組み合わせを考えた場合、大日経や金剛頂経を基本的な経典とする真言宗よりも、妙法蓮華経を基本教義としている天台宗、とりわけ台密（天台密教）との関連性が強いと考えられる。

また、金剛経は中国禅宗の六祖恵能大師との関わりから、日本の禅宗においてもよく用いられる経典である。禅宗は、平安時代にはすでに日本に伝えられているが、盛行するのは栄西、道元といった今日の禅宗諸派を開いた禅僧が活躍し始める鎌倉時代以降である。また、同時に金剛経の書写功徳も盛んに行われるようになり、幕府成立以降、貴族階級に代わり台頭してきた武士階級が禅宗を支持し始めた時代でもある。

本経塚は、経碑や願文を記した礫などが出土していないため、造営の目的が明らかではない。しかし、梵字が書写された経石の中に、唯一、願意が窺えるものがある。それは金剛界五仏が四方ではなく、縦に書写された No. 5 の経石である（第 51 図）。梵字の裏面に「南无大日如来」と記されている。「南无（無）」はサンスクリット語のナマス（namas）を漢訳したもので、帰

依という意味である。すなわち、大日如来に帰依するという願文と捉えることができる。また、梵字の中では、𑖩（バン：大日如来）を書写したものが最も多い。それらを主体部土坑の中心に埋経していることからも、経塚造営の背景に大日如来供養との関わりが想定される。

上記の点をふまえると、本経塚は納められた経典内容から天台宗との関連が推定され、中でも大日如来供養を主とした願意で造営されたと考えられる。また、金剛経が用いられていることと、経典の書風から、造営年代は鎌倉時代中期以降と推定される。

以上、本経塚の造営目的・年代を推定することはできたが、願主や写経と埋経儀礼を執り行った仏教集団については不明なままであり、課題を残すところである。しかし、本経塚から出土した礫石経は、岩手県はもとより全国的にも類例の少ないものであり、今後の経塚研究の布石としたい。

【引用・参考文献】（発掘調査報告書以外）

相原康二　2009 「岩手県出土の鏡鑑類について」『紀要ＸＸⅧ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

今泉淑夫編　1999 『日本仏教史辞典』吉川弘文館

金子佐知子　2000 「前沢町寺ノ上経塚出土のかわらけ経」『岩手考古学』第12号　岩手考古学会

川勝政太郎　1944 『梵字講話』一條書房

川崎利夫　1997 「天童市高野坊遺跡出土の墨書礫」『考古学ジャーナル』№412

川又隆央　2005 「宮城県の礫石経塚」『宮城考古学』第７号　宮城考古学会

古泉　弘　2001 「江戸の生活文化　２喫煙」『図説　江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会［編］ 柏書房

古泉　弘　1985 「江戸の街の出土遺物」『特集　江戸時代を掘る』 季刊考古学　第13号

斉藤忠編　1987 「墳墓と経塚」『日本考古学論集６』吉川弘文館

坂詰秀一編　2003 『仏教考古学事典』 ㈱雄山閣

種智院大学密教学会編　1983 『梵字大鑑』名著普及会

関根達人　2002 「死者を映した鏡」『人文社会論叢』人文科学編第７号　弘前大学人文学部

総合仏教大辞典編集委員会　2005 『総合仏教大辞典』法蔵館

田上太秀ほか　2008 『禅の思想辞典』東京書籍

中野政樹　1969 『和鏡』日本の美術10・11　№42　至文堂

永井久美男編　1998 『近世の出土銭Ⅱ』 兵庫埋蔵銭調査会

丹羽基二　1971 『家紋大図鑑』秋田書房

船場昌子　2002ａ 「中世における礫石経の諸相」『立正史学』第92号

船場昌子　2002b 「やぐらの埋葬と供養」『かながわの考古学』研究紀要７　財団法人かながわ考古学財団

松原典明　1994 「礫石経研究序説」『考古学論究』第３号　立正大学考古学会

吉田義昭　1960 「盛岡市狐野原一字一石経塚」『奥羽史談』第27号

立正大学考古学会　1994 「特集・礫石経の世界」『考古学論究』第３号

【引用・参考文献】（発掘調査報告書）
青森県教育委員会　2002 『畑内遺跡』第326集
尼崎市教育委員会　2005 『大物遺跡第一次調査概要　その5』尼崎市埋蔵文化財調査年報平成7年度（6）
飯田市教育委員会　1995 『経塚原遺跡』
いわき市教育委員会　1998 『上野原経塚』いわき市埋蔵文化財調査報告書第55冊
岩手県教育委員会　1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』岩手県文化財調査報告書第50集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996 『岩脇遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第235集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001 『志羅山遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006 『河崎の欅疑定地発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008 『飯岡才川遺跡第7・13次・細谷地遺跡第12次・矢盛遺跡第9次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第508集
岩沼市教育委員会　2005 『長徳寺前遺跡』岩沼市文化調査報告書第5集
財団法人かながわ考古学財団　2001 『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告117
新善光寺跡内やぐら発掘調査団　1988 『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』
白鷹町教育委員会　1988 『笠松山遺跡』
下諏訪町教育委員会　1990 『殿村・東照寺址遺跡』
玉山村教育委員会　1997 『一字一石一礼塔』玉山村文化財調査報告書第16集
津市教育委員会　2007 『中山下経塚発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告書5
長崎市埋蔵文化財調査協議会　1998 『馬場崎経塚調査報告書』
名取市教育委員会　1988 『大門山遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第22集
新潟県教育委員会　2000 『裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集
盛岡市教育委員会　1985 『盛岡市埋蔵文化財年報』―昭和55～58年度―
盛岡市教育委員会　1997 『永福寺山遺跡』―昭和40・41年発掘調査報告書―
盛岡市教育委員会　1999 『安倍館遺跡』―厨川城の調査―
盛岡市教育委員会　2002 『盛岡市内遺跡群』―平成13年度発掘調査概報
利府町教育委員会　1978 『菅谷道安寺横穴群』利府町文化財調査報告書第2集

写 真 図 版

経塚遠景（西から）

経塚全景（西から）

経塚主体部土坑内部

経塚主体部および盛土完掘状況（北西から）

主体部土坑　礫出土状況（L＝－0.5m）

礫詰み方状況（L＝－0.5m）

主体部土坑　礫出土状況（L＝－0.6m）

礫詰み方状況（L＝－0.6m）

主体部土坑　礫出土状況（L＝－0.7m）

礫詰み方状況（L＝－0.7m）

第４図版

主体部土坑　礫出土状況（L＝－0.8m）

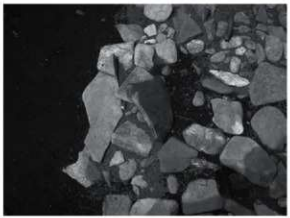
礫詰み方状況（L＝－0.8m）

主体部土坑　礫出土状況（L＝－0.9m）

礫詰み方状況（L＝－0.9m）

主体部土坑　礫出土状況（L＝－1.1m）

主体部土坑　完掘状況



経石10出土状況

経石14出土状況

経石34出土状況

経石93出土状況

経石130出土状況

皇宋通宝出土状況（盛土内部）

１号墓人骨出土状況

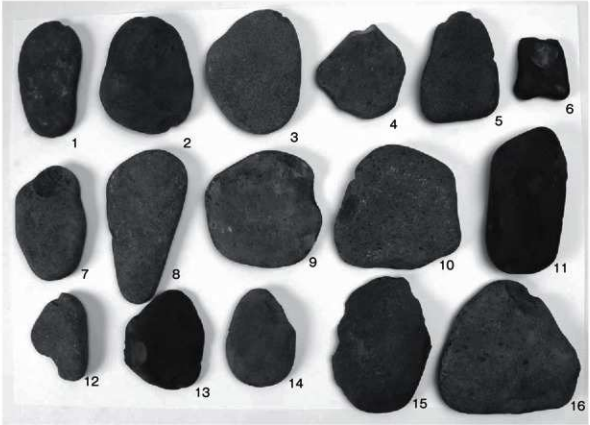
２号墓人骨出土状況

６号墓人骨出土状況

８号墓人骨出土状況

23号墓人骨出土状況

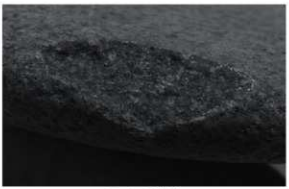
RG004溝跡



経塚主体部土坑出土　剥離痕のある経石

礫１の剥離痕

礫２の剥離痕



礫10の剥離痕

経塚盛土出土　皇宋通宝

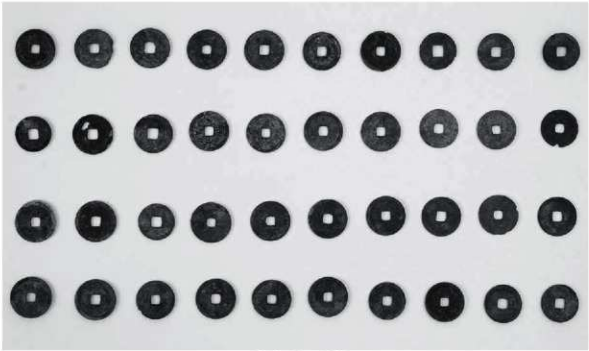
土坑墓出土　陶磁器

土坑墓出土　かわらけ

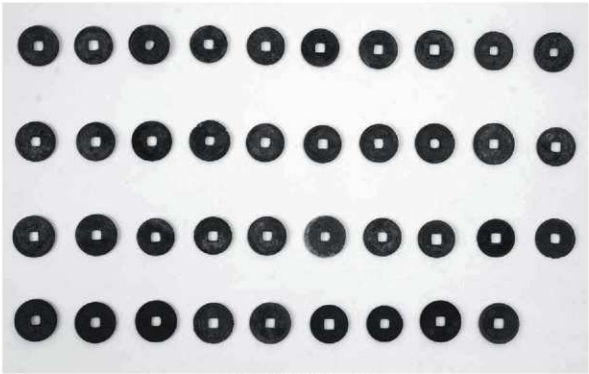
土坑墓出土　煙管

土坑墓出土　鏡ほか

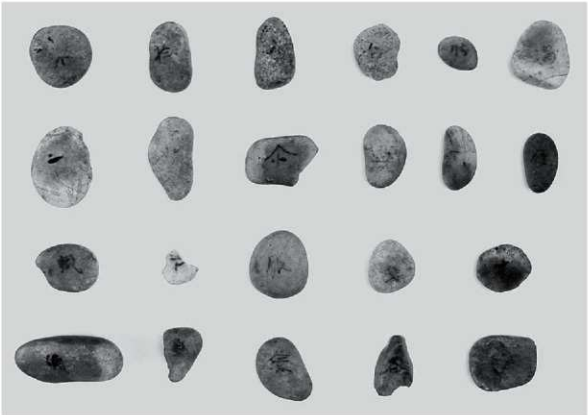
土坑墓出土　硯・砥石



土坑墓出土　古銭



土坑墓・遺構外出土　古銭



土坑墓・遺構外出土　経石（一字一石経）

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん
書　名	「盛岡市内遺跡群」
副書名	平成18・19年度発掘調査報告書
編著者名	佐々木亮二
編集機関	盛岡市　遺跡の学び館
所在地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　TEL 019-635-6600
発行年月日	2010年3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しょうたんなかきょうづか 宿田南経塚 （宿田南遺跡）	いわてけんもりおかしきた 岩手県盛岡市北 ゆうがおせまち 夕顔瀬町38			39° 42′ 38	141° 07″ 02″	第9次 2006.04.17～ 2006.06.21 2007.04.17～ 2007.08.02	126	個人駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿田南経塚 （宿田南遺跡第9次）	経塚	中世 近世	経塚　1 土坑墓　27	経石（多字一石経・一字一石経），陶磁器、かわらけ，寛永通宝，雁管，手鏡、縄縄文土器	県内初見の多字一石経を埋納した経塚と一字一石経が納められた近世土坑墓を確認した。

要　約	宿田南経塚は、県内初見の多字一石経と梵字を書写した経石を埋納した中世の経塚である。 納められた経典は「妙法蓮華経」、「金剛経」、「梵字（種子）」、「梵字（金剛界五仏）」など多岐に渡る。納められた経典内容から天台宗との関連が推定され、中でも大日如来供養を主とした願意で造営されたと考えられる。また、金剛経が用いられていることと、経典の書風から、造営年代は鎌倉時代中期以降と推定される。

盛岡市内遺跡群

宿田南経塚

（宿田南遺跡）

―平成18・19年度発掘調査報告書―

2010年3月12日　発行

編　集　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
電話 019-635-6600　FAX 019-635-6605

発　行　盛岡市教育委員会
〒020-8532　岩手県盛岡市津志田14地割37番2

印　刷　株式会社　光文社
〒020-0106　岩手県盛岡市東松園三丁目12番地1